

[一般論文]

1900 年と 1901 年の岡山孤児院の賛助員の 全国的な支援ネットワークシステムの構築の実態

中 嶋 洋、菊池 義昭

はじめに

筆者等は、岡山孤児院が財政危機を打開するため 1898（明治 31）年 5 月に賛助員を新設し、同員より毎月 10 銭の定期寄付を集めることを目指し、2 年 6 ヶ月後の 1900（同 33）年 9 月には全国各地から 1 万人の賛助員を募集し、明治 30 年代から同 40 年代に全国的な支援ネットワークシステムを構築した実践とその後の展開過程における歴史的役割を解明、分析する研究に着手した。そして、この研究課題を次の 4 つとした¹⁾。

(1) 賛助員の設置と全国的な支援ネットワークシステムをどのように構築したか。(2) 1 万人以上もの全国的な賛助員の支援ネットワークシステムをどのように運営し維持したか。(3) 賛助員の全国的な支援ネットワークシステムがどのように衰退していったか。また、(4) 個々の賛助員や賛助員と岡山孤児院の結節点となった個々の地方委員が、岡山孤児院の活動から、どのような啓蒙を受け、彼らの慈善事業に対する認識としての価値感（観）がどのように変化したかである。

さらに、前稿では、1898 年 5 月の賛助員の新設から 1899（同 32）年までの実態を解明した。その要点をごく簡単にまとめると、最初は、賛助員申込書を作成し、これまで支援をしてくれた関係者に送付し賛助員を勧

誘した²⁾。次に、 賛助金の集金と新賛助員を募集する専任の職員を配置し、岡山市や岡山県内、瀬戸内海沿岸の近隣市等で集金と募集を実施し、着実に実績を上げた。

また、 1898 年 2 月からは、やはり同院の財政危機を打開するため音楽幻燈隊を組織し、各地を巡回して寄付金を募集する運動にも着手し、その経験のなかから音楽幻燈会で新賛助員を募集する方法に気付き、一度に多数の新賛助員を集めることができるようになった。同時に、 同幻燈会の開催は、地元の基督教関係者などに協力を求め、協力者、発起者、賛同者が中心となって開催する方式が具体化し、そのなかの協力者等を地方委員に任命し、その地方委員が地元の賛助員の賛助金の集金や新賛助員の募集などを担当するシステムが成立し、各地を巡回して音楽幻燈会を開催するなかで、同時並行的に地方委員を核とする賛助員のネットワークが具現化していくことになった。加えて、 全国各地から直接岡山孤児院に賛助金の送金と賛助員への入会申込書が送付されるようになり、 から までの 4 つの賛助員募集等の方式が定着し、全国的な支援ネットワークシステムが構築されつつあった。

そして、前稿では的確に明記しなかった成果の要点を追記すると、新設から 8 ヶ月後の 1898 年 12 月の時点で総賛助員が 1,380 人となり、その 1 年後の 1899 年 12 月には総賛助員が 7,667 人に達し、1 万人まで 2,333 人に迫っていた³⁾。また、1898 年の総賛助金は 462 円 89 銭 5 厘となり、岡山孤児院の同年の総収入の 3.4% で、翌 1899 年は 4,014 円 64 銭と前年の約 8.7 倍となり、かつ同院の総収入の 18.7% に達しする実績を上げること成功した⁴⁾。

そこで、本稿では、前稿までの研究結果を踏まえつつ、1 万人の賛助員の目標を達成する 1900 年と翌 1901 (同 34) 年の賛助員募集と集金の実態を解明、分析していくことにする。つまり、研究課題の (1) の後半の「全国的な支援ネットワークシステムをどのように構築したか」から始め、

(2) の「1 万人以上もの全国的な賛助員の支援ネットワークシステムをどのように運営」したかの初期の実態の解明と分析を行うことにする。

また、1900 年と 1901 年の賛助員募集と集金の実態を解明するためには、その前提として、当時の岡山孤児院の動向を踏まえる必要があり、当時の同院の動向を簡単に記すと次のようになる⁵⁾。同院の財政は、先のように賛助員募集等および音楽幻燈隊による全国からの寄付金募集などで、危機的状况を脱しつつあるなかで、同院の 1900 年 3 月現在の院児数は男子 178 人、女子 84 人の計 262 人であった。職員は、4 月 20 日現在で 20 人おり、運営組織は大きく事務部、実業部、教育部（岡山孤児院尋常高等小学校）、養育部があり、これに宮崎県の高鍋町の近くの茶臼原に日向支部を設けていたが、1 月で事実上の閉鎖となった。

また、先の事務部はおおよそ内部と外部に分かれ、内部は内務部長 1 人、会計担当 1 人、賛助員担当 1 人、岡山孤児院新報担当 2 人の計 5 人、外部は音楽幻燈会準備係（先発員）2 人、賛助員募集係 3 人、慈善箱係 1 人の計 6 人、実業部は活版部 1 人、理髪部 1 人の計 2 人、教育部は教師が 5 人で尋常科 1 年から同 3 年と高等科 1 年から同 3 年を担当していた。養育部は 7 人（10 月 30 日）で、曹長伍長制の下で男子部 11 組、女子部 7 組、幼年部 2 組に分かれ生活していた。そして、翌 1901 年は、4 月 21 日の時点では院児が 215 人と 47 人減少したが、職員は増加傾向にあり、運営体制は昨年を引き継ぐ体制で、あまり変化がなく推移した。そんな中での、1900 年と 1901 年の賛助員募集と集金の実態を、次に解明、分析していくことにする。

1. 1900年の賛助員募集とその活動実態

1) 1900年の賛助員募集活動の概要

(1) 各府県別の新賛助員数と総賛助員数の推移

石井十次院長が「明治三十二年は實は感謝せざる可らざるの年にてあり(ママ)き何者明治三十二年は我が岡山孤兒院が教育上、養育上、財政上、に於て一大進歩をなしたるの年なればなり」⁶⁾と回顧しているように、1989年から1990年の実践は同院において大きな転機の1つになった。このことは、とりわけ財政上の問題における解決策が前進し、「然るに昨年(1989年)一月に於ては、僅々一千九百人なりし賛助員は十二月末に至りて七千六百人の多きに達し毎月七百余圓の収入の道を得たり」⁷⁾(傍点ママ・丸括弧内筆者)などと報じられ、賛助員募集やその活動展開が鍵であったということが理解できた。

そこで、ここでは1900年の賛助員募集活動の展開過程を浮き彫りにするため、同年の募集活動の全体像を、各月別各府県別の賛助員の加入者数の精査を通じ、概観し、その後に岡山県内の各月別市町村別の賛助員の加入者数及び賛助員集金活動の検討を通じ、具体的な活動内容の一端を明らかにしていくこととする。なお、岡山県内の各市町村別活動を注視した箇所では、各々の郡名は1900年4月1日、郡制施行後の郡名であることを付言しておく。

まず、毎月の各府県別の賛助員加入者数の推移をまとめると表1のようになる。各月別で見ると、4月(854人)、6月(810人)、10月(703人)、8月(588人)、1月(534人)の順に多くなっており、次いで各府県別の加入者数の大小で見ると、特に際立っているのが北海道(10月、530人)、山口県(4月、436人)、広島県(6月、421人)、福岡県(3月、349人/4月、253人)、香川県(1月、270人)などである。なかでも、最多であっ

1900年と1901年の岡山孤児院の賛助員の全国的な
支援ネットワークシステムの構築の実態（中篇・菊池）（107）124

表1 1900（明治33）年1月からの各月別各府県別の賛助員の加入人数

	1月	2月	3月	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月
北海道	32	8	2	7	4	7	14		161	530	41	21
青森県	1	1	1	1	2						157	15
岩手県												
宮城県	5		2		1	4						
秋田県		1										
山形県		1						2				
福島県					1						3	
栃木県	10	2							22	1	4	15
茨城県							1			1		
群馬県				11						2		
埼玉県		3				1			1	2		
千葉県					1	2	1	1	2	2		1
東京府	1	16	1	8		14	28	3	6	24	3	1
神奈川県	7		1	2	1	2	7	6	109		6	5
新潟県		1	2		1							
富山県								1				
石川県				1		1	1					
福井県		2		6	1							
山梨県	2											
長野県	6			1		15	5	4	2		1	1
岐阜県		1						68	2	1	1	
静岡県				1	1	1	1	47	51		3	4
愛知県	2			1				63	11	21		1
三重県	2			2		1		1	1			
滋賀県		1		1			105	97	24	3	2	3
京都府	5	10	11	15	11	20	1	14	7	12	2	10
大阪府	13	7	10	5	11	11	56	17	31	4	4	4
兵庫県	9	3	11	9	16	8	10	11	3		5	4
奈良県	4	3		6		1						1
和歌山県		7	2	2	13			39		53		6
鳥取県		1		1	1	1	1	1		1	1	13
島根県		6		9	2	1	2	1		1		
岡山県	43	100	57	62	36	97	21	10	17	19	142	50
広島県	20	6	11	4	48	421	152	42	15	5		7
山口県	17	4		436	26	117	21	6	2	1	1	
徳島県		5			124	15		4	2		2	1
香川県	270	15	3	3	157	35	4	131	12	3	9	2
愛媛県	6	3	15	1	8		13	8	2	5	3	1
高知県	1	2	16		7	2	6	6	7	6	12	
福岡県	54	20	349	253	24	22	17	2	1	5	16	2
佐賀県				1		4		1				
長崎県					3			1		1		15
熊本県	3	2			1		1	1				
大分県			6			1						
宮崎県		1	3	1	4	2			1		2	
鹿児島県	3					2						
沖縄県						2						
韓国	1					1						
台湾											1	
臺北縣	17	4										
佛国			1									
米国				4			2					
臺灣陸軍					1							
ホノルル府						1						
露国												1
総数	534	236	504	854	515	810	471	588	492	703	421	179

<注> 空白は人数がゼロである。（『岡山孤児院新報』第40号から第51号附録より作成）

た北海道においては、同年8月23日から9月20日まで、函館区を皮切りに北海道内12区町村で音楽幻燈会を開催し、光延義民先発員による小樽区での音楽幻燈会や小野田鎮らによる旭川町音楽幻燈会などの開催で、地道な寄付金募集と同時に実施した賛助員募集活動が奏功していたといえる。小野田が、現地での状況を臨場感をもって伝えた文章の一端は次のようなものであり、注目できた⁹⁾。

……會の状況を記さんに定刻前より続々入場する者の引も切らず何つれも設けの席に就て開會を俟たれぬ斯て入場者ますます多く忽ち満員となり折角の來會者をして入る能はず余儀なく木戸止めをなすに至れり午後七時正に開會の時は來れり樂隊が愛國の譜を奏し終るや友田文次郎君開會の辭と共に石井院長を來會者に紹介せられ斯くて例の如奏樂數回幻燈あり就中夕張炭山より七才の か唯一人本院に來りし履歴を説明したる時は満座恰も水を打たる如く寂として聲なく至大の感動を與へ同情を惹起したり……。

(『岡山孤兒院新報』第48号)

つまり、一連の同幻燈隊の運動は、音楽幻燈を通じた単なる賛助員獲得のみならず、すでに岡山孤兒院に入院している児童のいきさつや院児の生活実態を幻燈などを通して視覚化し、実感を伴いながら広く周知することで、真の理解者や協力者を増やし、賛助員募集を実施したことが窺えた。

一方、1900年の各府県別の賛助員の加入者数を月別に見た上で、ひと月の増員数が100人を超えているケースを回数別に捉え直すと、3回が香川県(1月、5月、8月)であり、2回が岡山県(2月、11月)、広島県(6月、7月)、山口県(4月、6月)、福岡県(3月、4月)であり、1回が北海道(10月)、神奈川県(9月)、滋賀県(7月)、徳島県(5月)などであった。逆に、加入人数が少なかった府県としては、岩手県(0人)、富山県(1人)、沖縄県(1人)などがあげられ、賛助員の加入者数の拡がりには全

国的に見られたものの、地域差も少なくなかったと言える。

その他、海外からの加入では臺北縣（21人）、米国（6人）、韓国・台湾・
佛国・臺灣陸軍・ホノルル府・露国（各1人）となっており、その影響力
は国内に留まるものではなかったことも注目できた。

（2）岡山県内の各月別市町村別の賛助員の加入状況

次に、1900年における岡山県内の各月別市町村別の賛助員の加入状況
については、表2（巻末資料181頁）のように整理できた。月別に見ると、
11月（142人）、2月（103人）、6月（98人）、4月（61人）などの順に多
くなっており、なかでも、117人の加入があった倉敷町（11月）、32人の
加入があった下津井町（6月）、27人の加入があった児島郡味野村（6月）
などが目を惹く。とりわけ、倉敷町に関しては、同年10月25日に、「倉
敷大原孫三郎・林源十郎両君来院せらる大原君は兼て孤児と共に食事せん
との希望ありしが此日本院食堂に於て晩飯を試み満腹主義の仲間入りをな
され牛肉代として金五圓を寄附せらる」などの動きが確認できた⁹⁾。加え
て、同日の朝の集会時に曹長らに向けて発せられた石井院長の言葉は、院
児に対する職員や年長児の心構えとともに、彼の養育観の基軸が窺えるも
のとして注目できた¹⁰⁾。

岡山孤児院は可憐なる孤児弟妹を取扱ふ些の隔てなく眞の同胞として
之を教養するは多年實行し来れる方針にして今後も決して変更せざる所
の者なりされば特に曹長諸子は子供の世話をなすに當り神の恩恵に感謝
して為すべし命ぜられたる如くせぬば叱責るなどの心を以てなすべか
らず云々。（ルビママ）
（『岡山孤児院新報』第49号）

（3）賛助員からの集金額とその内訳の推移

このように、各府県別及び岡山県内の賛助員の加入状況を把握した上で、

ここでは、1900年の月別全集金額とその内訳の推移について表3（巻末資料185頁）のようにまとめることができた。そして、その推移を本部直接収入、職員による集金、地方委員による集金の3つに分けてみていく。まず、では、5月（92円250銭）、2月（88円80銭）、1月（74円660銭）、7月（61円700銭）、9月（53円700銭）の順に多くなっている。次に、については、宮崎利平・佐藤惣吾らが岡山市内で行った集金活動が目を惹き、その活躍ぶりは111円650銭（5月）、109円950銭（7月）、92円800銭（11月）、89円（3月）、87円300銭（1月）などの実績からも窺い知れよう。加えて、宮崎利平は同市内や福山町での活躍が目覚ましくかった。この他には、岡山県内の西大寺町、久世町、勝山町、玉島町などで集金活動に勤しんだ宮崎兵吉郎、徳島市で同様の活動をした大西義一らの働きが注目される。さらに、大阪市では1月から5月まで5ヶ月間連続で集金活動を行った小野田鎮の活躍が注目され、47円600銭（1月）、12円700銭（2月）、43円600銭（3月）、44円900銭（4月）、78円700銭（5月）などの実績があげられ、上半期に集中的に集金していたことが分かった。

一方、岡山県以外の各地の地方委員による地道な集金活動が展開されたことも見逃せない。そこで、については、表3で確認したところ、まず、京都市の辻慶三地方委員の活動が目撃された。具体的には、1年間のうち1月と9月を除く10ヶ月間集金活動を展開し、48円200銭（8月）、47円900銭（12月）、27円200銭（2月）、25円750銭（3月）、24円100銭（10月）などの主な成果が見られた。

この他、集金額のみで見ると、東京市の福島四郎地方委員（77円200銭、1月）、同市の小崎弘道地方委員（54円200銭、5月）、大阪市の池田為治地方委員（54円750銭、12月）などが精力的に活動していたことが示唆された。

他方、地方委員による活動の継続性という観点から見た場合、上述の辻

地方委員や、高知市の村田宗兵衛地方委員（1月から3月、5月、7月、9月、11月、12月）、福岡市の片山静之助地方委員（3月から8月、11月から12月）、久留米市の佐々木高地方委員（3月から5月、7月から11月）、札幌区の越智喜三地方委員（2月から4月、6月から7月、9月から10月、12月）などの動きが注目できた。但し、ここでも切れ目なく活動が行われることが少なかったことから、当時の集金活動の苦難が推察された。

つまり、1900年の賛助員集金活動においては、職員と同様に地方委員による活動が展開されていたと捉えられ、福島地方委員（東京市）や池田地方委員（大阪市）などのように、大都市において多額の集金に成功した事例がある一方、宮崎利平や佐藤惣吾らの職員に比べ、地方委員による集金活動は、集金額そのものが低調で、断続的・中絶的なものであったことが確認できた。

そして、岡山孤児院の音楽幻燈隊運動の始動から丸3年経過したこの年の10月30日、「岡山孤児院を紹介し其募集せる寄附金式萬圓賛助員壹萬人を超えたるは實に感謝の至りなり之れ天の?助と天下の全情に由ると雖も又内部の働を外部の働きとの相一致して進みたるに由らすんはあらず今後も諸君が同一方針を以て内外相一致して益々勉励せられんことを希望す云々」などと朝集会で訓話した石井院長の言葉からも¹¹⁾、職員や地方委員による活動を基盤としつつも、関係者たちが軌を一にして刻苦勉励することを通じ、同院が前進することを石井院長が切望していたことが読み取れる。

以上が、1900年の賛助員募集活動の実態であるが、このような活動の結果、同年1月から12月までの月別の賛助員数の推移は、表4のようになり、1月末の総賛助員数が7,303人から9月末には10,310人に達し、1万人の目標を達成し、12月末には10,872人となった。また、毎月の賛助員の集金額も、毎月400円台から700円台あり、最大は12月の765円21銭、最低が3月の427円79銭となり、年間合計は6,695円7銭2厘を集

表 4 1900 年の月別賛助員数と賛助金集金額の推移

	新賛助員	総賛助員	退会等	月末総数	賛助金集金
1 月	236 人	7,903 人	600 人	7,303 人	449 円 740
2 月	501 人	7,804 人	28 人	7,776 人	501 円 380
3 月	854 人	8,630 人	180 人	8,450 人	427 円 790
4 月	512 人	8,962 人	219 人	8,743 人	551 円 732
5 月	810 人	9,553 人	467 人	9,086 人	677 円 780
6 月	427 人	9,513 人	177 人	9,336 人	494 円 260
7 月	574 人	9,910 人	397 人	9,513 人	641 円 040
8 月	488 人	10,001 人			562 円 790
9 月	718 人			10,310 人	477 円 100
10 月	422 人	10,732 人	61 人	10,671 人	571 円 050
11 月	180 人	10,851 人	167 人	10,684 人	584 円 600
12 月	247 人	10,931 人	59 人	10,872 人	765 円 210

(*岡山孤児院新報。第 40 号から第 52 号附録より作成)

める成果が確認でき、同院の同年の総収入 (27,892 円 2 銭 9 厘) の 24% を占めていたことが確認できた。

2. 1901 年の賛助員募集活動の展開とその実態

1) 1901 年の賛助員募集活動の概要

(1) 新賛助員数と総賛助員数の推移

1901 年の賛助員募集活動の展開過程を解明していくためには、その前年の同募集活動の展開結果を前提にしつつ、本年の同募集活動の全体像としての概要を把握し、その後、具体的な活動内容を明らかにしていくことにする。また、先の概要は、1901 年に募集した月別の新賛助員数とそれを加えた総賛助員数の推移の把握から始め、次に新賛助員と現賛助員から実際に集金した月別の全賛助金額の推移を確認するという手順を進めていくことにする。つまり、1901 年の賛助員募集活動の解明は、この 2 つの概要がどのように具体化されていくかを解明することで、その実態が判明

すると理解するからである。なお、以下において、賛助員募集活動や賛助員募集と表記する場合は新賛助員募集と賛助金の集金の2つの活動内容を
含むことを付記しておく。

そこでまず、毎月の賛助員募集の推移を見ていくと、新賛助員は大きく岡山孤児院へ直接入会する第1種と各地の地方委員と音楽幻燈会および職員が出張して募集する第2種があった。さらに、1月からは、賛助員からの希望により、これまでの毎月10銭を出金（集金）する方法（毎月出金者）に加え、1年分1円を1度に出金（集金）する方法（1年分出金者）が新設された¹²⁾。

このような要件別の毎月の新賛助員募集の推移をまとめると、表5¹³⁾のようになる。このうち、第1種の岡山孤児院への直接入会者は、毎月12人から100人で、その内訳は毎月出金者が11人から73人、1年分出金者が1人から48人であった。一方、第2種の地方委員や職員等による募集は、毎月150人から487人と第1種の約3倍から12倍の募集があり、1901年も第2種の地方委員や職員等による新賛助員募集が重要な役割を

表5 1901年の月別の新賛助員数、総賛助員数と現賛助員の1年分出金者の内訳

	第1種			第2種			合計	総賛助員数と退会者数			現賛の1年分出金者		
	毎月	1年	計	毎月	1年	計		月末合計	退会者	月末現在	第1種	第2種	計
1月	34人	16人	50人	150人	188人	338人	388人	11,260人	49人	11,211人	16人	196人	212人
2月	37人	32人	69人	135人	294人	429人	498人	11,709人	75人	11,634人	47人	343人	390人
3月	27人	48人	75人	91人	179人	270人	345人	11,979人	58人	11,921人	44人	284人	328人
4月	35人	34人	69人	277人	210人	487人	556人	12,477人	96人	12,381人	45人	139人	184人
5月	73人	27人	100人	273人	102人	375人	475人	12,856人	108人	12,748人	21人	192人	213人
6月	19人	16人	35人	106人	51人	157人	192人	12,940人	40人	12,900人	30人	97人	127人
7月	28人	7人	35人	229人	16人	245人	286人	13,186人	64人	13,122人	20人	50人	70人
8月	20人	16人	36人	119人	31人	150人	186人	13,308人	29人	13,179人	6人	47人	53人
9月	63人	21人	84人	134人	27人	161人	245人	13,423人	52人	13,371人	19人	28人	47人
10月	11人	1人	12人	180人	18人	198人	211人	13,582人	197人	13,385人	4人	41人	45人
11月	11人	1人	12人	138人	13人	151人	163人	13,548人	123人	13,425人	10人	42人	52人
12月	11人	12人	23人	165人	43人	208人	231人	13,656人	2,216人	11,440人	30人	140人	170人

<注> 第1種は岡山孤児院に直接入会分、第2種は地方委員等の募集分、毎月は毎月出金者、1年は1年分出金者、現賛の1年分出金者は現賛助員の1年分出金者数の略。7月の毎月と10月の合計の数字に誤記あり。（¹³⁾岡山孤児院新報：第52号から第64号より作成）

担っていたことが理解できた。また、その内訳の毎月出金者が91人から229人で、1年分出金者が13人から294人であったため、全体的には毎月出金者が多く、特に6月以降は1年分出金者が急減していた。さらに、第1種と第2種の合計では、毎月163人から556人で、1月から5月までが毎月300人台から500人台であったが、6月から12月までは100人台から200人台に減少し、1年間の新賛助員数は2,396人という計算になり、前半に新賛助員募集の実績が高く、後半は少し停滞していく傾向が理解できた。

その結果、総賛助員数の月別推移も、月末合計では1月の11,260人から12月の13,656人に増加したが、実際には退会者がおり、これを加味した月末現在では、1月の11,211人から11月の13,425人までは2,214人増加したが、12月に2,216人の退会者がいたため11,440人と、初めて総賛助員が減少していくことが確認できた。たぶん、この2,216人は、一定期間賛助金を出金しなかった賛助員2,216人を、12月に岡山孤児院の判断で退会者と定めたための減少とみることができた。このため、総賛助員が13,000人前後に達していたが、実際に集まる全賛助金は、総賛助員数より少なくなることが理解できた。

そこで次に、毎月集まる賛助金の全集金額とその内訳の推移をみていくことにする。

(2) 賛助金の月別全集金額とその内訳の推移

1901年の月別全集金額とその内訳の推移については、前者の月別全集金額は確認でき、そこから類推すると表6¹³⁾のように仮定できた。つまり、月別全集金額は、毎月の新賛助員と現賛助員からの出金(送金または集金)額の合計であり、その中の1年分出金者数は、表1から新賛助員の第1種(1年)と第2種(1年)の人数および、現賛助員で本年から1年間1円の出金に変更した第1種と第2種の出金者数が確認できたため、両者の出金

表6 1901年の月別賛助金の全集金額とその内訳

	新賛助員の1年分出金者と集金額				現賛助員の1年分出金者と集金額				= 毎月	賛助金全集金額
	第1種	第2種	計	集金額	第1種	第2種	計	集金額		
1月	16人	188人	204人	204円000	16人	196人	212人	212円000	155円886	938円600
2月	32人	294人	326人	326円000	47人	343人	390人	390円000	185円886	901円886
3月	48人	179人	227人	227円000	44人	284人	328人	328円000	250円900	805円900
4月	34人	210人	244人	244円000	45人	139人	184人	184円000	329円350	757円350
5月	27人	102人	129人	129円000	21人	192人	213人	213円000	340円800	682円700
6月	16人	51人	67人	67円000	30人	97人	127人	127円000	352円700	546円800
7月	7人	16人	23人	23円000	20人	50人	70人	70円000	528円975	621円975
8月	16人	31人	47人	47円000	6人	47人	53人	53円000	371円855	471円855
9月	21人	27人	48人	48円000	19人	28人	47人	47円000	372円490	471円490
10月	1人	18人	19人	19円000	4人	41人	45人	45円000	444円760	508円760
11月	1人	13人	14人	14円000	10人	42人	52人	52円000	296円020	362円020
12月	12人	43人	55人	55円000	30人	140人	170人	170円000	521円850	746円850

<注> 新賛助員の1年分出金者と集金額は新賛助員の中の1年分出金者数と集金額、現賛助員の1年分出金者と集金額は現賛助員の中の1年分出金者数と集金額、 - - = 毎月は - - = 毎月出金者の集金額の略。12月の計は154人とあったが170人の誤記。
(『岡山孤児院新報』第52号から第64号より作成)

額が想定できた。例えば1月の1年間1円の新賛助員数は第1種16人、第2種188人で計204人となり、その出金額は204円と仮定でき、一方、現賛助員の1年間1円の出金は第1種16人、第2種196人の計212人となり、その出金額は212円と推定でき、2月以降もそのような方法で計算した金額は表2の「集金額」と「集金額」のようになった。そして、月別全集金額より各月の「集金額」と「集金額」を差し引いた金額が、各月の新賛助員と現賛助員の毎月出金者の出金額と計算できた。つまり、1月の場合は212円と204円の計416円が、1月の全集金額の一部と仮定できたため、1月の全集金額938円60銭から416円を差し引いた155円88銭6厘が毎月出金者からの集金額と算出でき、2月以降も同様の計算を実施し表6を作成した。

このことを前提に、1901年の月別の賛助金の全集金額とその内訳の推移をみていくと、新賛助員の中の1年分出金者からの集金額は、11月の最低14円から2月の最高326円となり、1月から5月までは100円台か

ら 300 円台の集金があったが、6 月からは 10 円台から 60 円台に減少していた。また、第 1 種の出金者と第 2 種の出金者の割合は前者の約 3.6 倍から 18 倍が後者であったため、その集金額の大半が地方委員や職員等による集金額であったことが理解できた。

次に、現賛助員の中の 1 年分出金者は、10 月の最低 45 円から 2 月の最高 390 円となり、1 月から 6 月までは 100 円台から 300 円台であったが、7 月から 11 月は 40 円台から 70 円台に減少し、12 月に 100 円台に回復していたが、全体的には、新賛助員と同様に後半から減少していく傾向にあった。さらに、第 1 種と第 2 種の全体的な割合は、後者が前者の約 1.5 倍から約 10 倍と、やはり後者の地方委員等による集金額が多かった。

そして、毎月出金者の集金額は、1 月の最低 155 円 88 銭 6 厘から 7 月の最高 528 円 97 銭 5 厘となり、1 月と 2 月が 100 円台、3 月が 200 円台、4 月から 6 月が 300 円台、7 月が 500 円台、8 月と 9 月が 300 円台、10 月が 400 円台、11 月 200 円台、12 月 500 円台と月を追うごとに増加傾向にあり、1 年分出金者と反比例していたことが理解できた。ただし、第 1 種と第 2 種の集金割合は不明だが、やはり第 2 種の地方委員等の集金が多かったと予想できた。

このため、月別の賛助金の全集金額は、11 月の最低 362 円 2 銭から 1 月の最高 938 円 60 銭となり、8 月と 9 月が 400 円台、6 月が 500 円台、5 月と 7 月が 600 円台、4 月と 12 月が 700 円台、3 月が 800 円台、1 月と 2 月が 900 円台と 1 月から 4 月までの集金額が多く、その後減傾向となり、12 月に一時回復していた。また、その結果、1901 年の賛助金総額は 7,803 円 18 銭 6 厘となり、岡山孤児院の歳入 (29,665 円 75 銭 6 厘)¹⁴⁾ の 26.3% を占めていた。そして、この毎月の全集金額の中心は、第 2 種の地方委員、職員、音楽幻燈会での新賛助員と現賛助員からの集金額であったと仮定できた。

つまり、先の新賛助員募集も、賛助金の集金も、第 1 種より第 2 種の職

員と地方委員による募集と集金活動が重要な役割を担っていたことが理解できたということであり、以下ではその全体的な実態を解明、分析していくことにする。その順序は、賛助員募集と集金活動で重要な役割を担っていた、第2種の中の職員による新賛助員募集と賛助金集金がどのように実施されたのかを解明し、次に音楽幻燈隊による新賛助員募集と地方委員がどのように拡大していったかを明らかにする。そして、先の地方委員による新賛助員募集と賛助金の集金がどう推移していくかを解明し、最後の第1種の岡山孤児院に直接入会した新賛助員と直接送金した賛助金の内容を明らかにし、賛助員の全国各地への拡大がどのように展開し、その拠点（結節点）となる地方委員の支援ネットワークが、どう具体化して行ったかを解明、分析していくことにする。

そこで次に、先の から の課題を、1901年の職員体制と関係などからより明確化していくことにする。

(3) 1901年の職員体制と解明の課題

石井院長は、1月4日に1901年の岡山孤児院の運動方針を「静思」し、「一、失意のときには忍耐せよ 得意の時には油断するな 而して外部に向っては大胆なれ」と、3年前の1898年から着手した音楽幻燈隊による全国各地への巡回運動と1万人に達した賛助員募集を「大胆」に実行していくことを再認識した¹⁴⁾。さらに、その意義は、「二、孤児院は天国にして世の仁人義士がその財宝を積むところなり（悟解）」と、岡山孤児院は天国であるので、一般の篤志家が積善のために寄付を行う場所と位置付けていた。さらに、「三、昨年年初の計画は本年に完く実行せらるべし 之れ年来の経験なり（理想の実現するに少くも一年を要す）」と記し、昨年からの計画を実行することを決意し、「四、計画なければ成功なし」と自覚していた。

また、この計画を具体化し実行するための職員の組織体制（「新内閣」）

を編成し決定した。このうち音楽幻燈隊による寄付金募集と賛助員募集は「外部運動員」が中心となり実行し、そのメンバーは、昨年から引き続き光延義民、大西義一、宮崎利平、入江大九郎、佐藤惣吾、宮崎兵吉郎の7人であった。これに、全国各地からの寄付金、入院願等の事務や財政を担当する職員として、書記に林長知、書記補に長野米吉、会計に田中正善、賛助員掛に河本茂四郎と原武夫を配置し、賛助員募集関係の事務処理の体制を強化した。

つまり、1901年の賛助員募集活動は、石井院長の内なる認識では、天国である岡山孤児院へ、全国各地の篤志家が積善のために寄付をする場という位置付で、その前年から引き続く職員体制で実施したのであった。その実際の職員体制は、大きく3つに分担され、大西義一と宮崎利平が東京市に在駐して同市等で賛助員募集と集金等を実施し、佐藤惣吾と宮崎兵吉郎が岡山市と岡山県内の町村で賛助員募集と集金等を、入江大九郎は関西方面を含む近隣県の賛助員募集と集金を実施することにした。

また、これに加えて、1900年までの約2年間で1万人の賛助員募集に成功した重要な要件として注目できたのが、全国各地を巡回した音楽幻燈隊の中での賛助員募集と地方委員の任命であり、さらに、その地方委員による賛助金の集金と新賛助員の募集等の活動である。そして、岡山孤児院へ直接送付される新賛助員の入会と賛助金もあった。このため、以下では からの賛助員募集活動の具体的な展開を解明、分析していくことにする。

2) 職員による東京市での賛助員募集運動

(1) 政財官界の夫人等の組織化と「賛助員募集趣意書」

まず、職員による東京市での賛助員募集運動は、1900年11月1日に大西義一が同院を出発し、その後12月6日には宮崎利平が午後12時の夜行列車で応援に向ったことから始まった¹⁵⁾。この背景には、1899年4月22

日から5月11日まで東京市内12ヶ所と横浜市で音楽幻燈会を開催し、1900年1月の時点で東京市に537人の賛助員と3人の地方委員がいたためであった。

そして、1900年11月14日には、賛助員申込書を1,000枚印刷し、うち700枚を東京市の大西に送り、27日には大西より石井院長に来信があり「余程本事」になりつつあるとの報告により、同市での賛助員募集の準備が整い本格的な運動を実施していくことになったようである。また、大西が滞在していた住所は、東京市芝区西大久保桜川2番地のようであった。そこで、12月6日に宮崎利平を応援として上京させ、15日には大西より電報が届き、福島市から岡山孤児院に収容する孤女を東京で受取り、報知新聞社の松岡とも女史が同伴して同院へ出発したとの連絡が確認できた。また、14日と18日には、宮崎から同院長へ手紙が届き、28日にも大西より来信があり、すぐに返信していたがその内容は判明しない。ただ、石井院長の明日の仕事に「岡山孤児院の訂正をなすこと、画帖を訂正すること、賛助員募集趣意書」を印刷するとあったことから、同趣意書他の送付依頼であったとみる。このうち「賛助員募集趣意書」は、次のようなものであった。

岡山孤児院は創立以來茲に十三年全國三府二十七縣より收容教育せる孤兒の數五百五十餘名に上ほり現在尙二百七十名餘の我が弟妹が院内の撫育を受け和氣融融たる間に生長しつゝあり然るに同院は充分の資金あるにあらず是等の大家族を養ふに内外慈善家の臨時寄附金賛助員の賛助金並に全國停車場掲置の寄附金函投入金により其他は院内實業部の収益を以て漸く支持し來れり爲めに今日まで院長石井氏を始めとして事務員諸氏の苦慮焦心は筆帑の尽す能はざる處なり此實況を聞見致し候人々は何れも同情に堪へざる事と存候現今一萬有餘の賛助員を有するに至りしも毎月經常費のみにて實に一千二百圓の多額を要し而かも事業は倍々膨

脹し少數の力にては到底維持の程も覺束なき次第に有之候右に付き今回
同院は今一層廣く全國の慈善家に訴へ賛助員を募らんが爲に數名の事務
員を出張致させ候へば同院の事業の爲め何卒賛助員中に御加盟被下尙御
知己の方々をも御勧誘の程切望の至に御座候

別帑孤兒院冊子並に畫帖賛助員申込用帑相添へ大方の得貴意候敬具

明治三十三年十二月

賛助員総代 (イロ八順)

公爵夫人 近衛貞子 / 侯爵夫人 大山捨松子 / 侯爵夫人 池田鑑
子 / 伯爵夫人 大隈綾子 / 巖谷季雄夫人 巖谷ゆう子 / 鳩山和
夫夫人 鳩山春子 / 濱尾新夫人 濱尾作子 / 原亮三郎夫人 原禮
子 / 徳富猪一郎夫人 徳富靜子 / 大関ちか子 / 河野廣中夫人
河野關子 / 門野幾之進夫人 門野駿子 / 鹿子木艶子 / 高橋新吉
夫人 高橋鈴子 / 高木豊三夫人 高木こう子 / 津田梅子 / 根本
正夫人 根本とく子 / 潮田千勢子 / 瓜生 夫人 瓜生繁子 / 山
脇玄夫人 山脇ふさ子 / 矢島揖子 / 小崎弘道夫人 小崎千代子
/ 遠藤喜太郎夫人 遠藤庫子 / 安藤太郎夫人 安藤ふみ子 / 阿部
泰蔵夫人 阿部優子 / 山東直砥夫人 山東ふさ子 / 清藤秋子 /
三好退藏夫人 三好壽代子 / 三輪田眞佐子 / 下田歌子 / 島田三
郎夫人 島田信子 / 白川勝文夫人 白川和子

追て從來の賛助金取續方は毎月地方委員より集金者差遣はし居候處斯く
ては費用多く相掛り今般一年一圓一回拂込みと改めたく候間御賛同願上
度候申込書は神田區錦町三丁目五番地山下館假事務所宛に御送付を請ふ

(『岡山孤兒院新報』第 53 号)

つまり、大西は、11月1日に上京し、東京市内の公爵近衛篤磨の夫人
近衛貞子、侯爵大山巖の夫人大山捨松、侯爵池田章政の夫人池田鑑子、津
田梅子、矢島揖子などの政財官界など各界の著名人の夫人やキリスト教関

係の婦人などを訪問して、同市内での賛助員募集運動の準備に取り組み、その結果先の32人を賛助員総代として組織化したことが理解できた。そして、大西と宮崎は、「同趣意書」を持参して市内在住の各界の著名人宅を訪問して新賛助員の募集や集金を行うために活用していくことが理解できた。また、その際の賛助金は、従来までの毎月10銭ではなく、1年1円を1回で払う方法に変更することを推奨した。このように、大西は上京後2ヶ月程で政財官界など各界の著名人の夫人等を組織できたのは、前述したように、昨年4月22日から5月11日まで石井院長と音楽幻燈隊が上京し、今回賛助員総代となった夫人たち等が発起人や賛成者となり、音楽幻燈会を開催していた実績があったからである。

(2) 1月の賛助員募集運動の内容

そして、1901年1月10日の『岡山孤児院新報』第51号の1面に、岡山孤児院東京出張所の宮崎と大西の連名で「特別広告」を掲載し、東京市での賛助員募集運動が本格化していくことが理解できた¹⁶⁾。つまり、東京市神田錦町3丁目5番地山下旅館に臨時出張所を設け、東京市で宮崎と大西の2人の事務員が「賛助員並孤児救済孤児院新報の広告取次等」を実施するので、御用の方は端書で連絡していただければ早速訪問するという内容であった。

また、1月5日には、大西から石井院長に「東京通信」が送られ、「趣意書と申込書」15,000枚の送付依頼があった。このことから、大西は、「東京通信」を定期的に送付し、昨年11月14日に送った700枚の「賛助員申込書」を使って同市で賛助員募集を実施し、さらに、「同申込書」が必要になっていたことが理解できた。その後8日と11日には、宮崎からも「東京通信」が岡山孤児院に届いていたため、この「通信」を読み、12日石井院長は、大西に「忠告状」を送付した。つまり、この「忠告状」の内容は不明だが、石井院長としては、一時宮崎を岡山孤児院に帰院させる

ことを考えたようであった。このため、宮崎は15日の急行で帰院し、16日の朝集会で「東京運動」を報告した。その報告の中で、宮崎は賛助員募集法を紹介したようで、石井院長は「宮崎流とは現在の賛助員に名刺の紹介状を貰ひ自ら往きて賛助員を募る」と記していたため、東京市での賛助員募集方法の一端が理解できた。そして、15日後の30日午後1時26分の急行で退院児1人を引率し再度東京に出発したため、東京出張所での賛助員募集を再開したことが確認できた。なお、宮崎は帰院中に、倉敷町で11円40銭を募集していた。

さらに、この間の東京出張所の12月と1月中とみられる賛助金の全集金額は362円90銭という高額の寄付金を集めることができた。また、この362円90銭には、新賛助員の賛助金と現賛助員の賛助金が含まれていたと見ることができた。そこで、『岡山孤児院新報』第52号に掲載された「新賛助員」の住所と氏名の中の東京市より1900年12月と1901年1月に入会した人数をまとめると、12月入会者62人(1年間分入金)、1月入会122人(同)であった。さらに、現賛助員の集金者は151人となり、これが12月から1月の賛助員募集活動の成果と理解でき、東京出張所の新賛助員募集と集金は非常に効率的な寄付金募集活動であることが確認できた。

そして、新賛助員には、子爵松平直徳の夫人松平精子、伯爵大隈重信の夫人の大隈綾子、日本正教会の創建者のニコライ大主教、立教中学校長の元田作之進、明治学院のワイッコフとランチス、日本力行会の創立者の島貫兵太夫、熊本バンドの1人の海老名弾正、麻布中学校長の江原素六などの各界の著名人の入会が確認できた。

(3) 2月の賛助員募集運動の内容

さらに、2月10日の『同新報』第52号にも、大西と宮崎の「特別廣告」が掲載され、東京市内で賛助員募集活動を継続していた¹⁷⁾。その活動の内容が、『同新報』第53号(1901年3月10日)の「東京通信」に記載され

ていた。

その「通信」によると、2月2日は、報知新聞の記事を読んだ横浜市戸田町の石井安子から手紙をもらった大西が、同宅を訪問し100円の寄付を受け、静養中の大磯の別荘を訪れると、盲女の収容依頼を受けたことや、石井安子の付添看護婦が、1899年5月20日に華族会館で開催された岡山孤児院の音楽幻燈会を参観していたと記される。

2月7日の宮崎からの通信によると、貴族院議員の三好退蔵、山脇玄、浜尾新、池田章政、近衛篤磨の5人より、下記の添書をいただき「運動」を行うことになったとの報告があり、先の「賛助員募集趣意書」と添書を持参して、東京市内の有力者宅を訪問して賛助員募集を実施していたことを確認できた。

拜啓時下益々御清安奉賀候陳者岡山孤児院の現状維持并に擴張の必要上別紙旨意書の通り此度賛助員募集致度趣に付同院の事業御贊成の上何卒賛助員中に御加盟被下度切望の到りに御座候敬具

明治三十四年二月 日

三好退蔵 / 山脇 玄 / 濱尾 新 / 池田章政 / 近衛篤磨

殿 (『岡山孤児院新報』第55号)

10日午前10時から、芝区芝園橋惟一館に於いて岡山孤児院賛助員募集のための演説会を開催し、150人程度の聴衆を前に大西が同院の歴史について約1時間説明し、その後、安部磯雄が「慈善事業の精神」について講演し、会長の佐治実然が賛助員への入会を熱心に奨励したところ16人から申込があり、6円50銭が集まった。また、山陽堂主人の逸見勝誠を訪ねたところ、同院卒業児2人の雇用希望があった。

16日には、岩倉公爵夫人の岩倉久子より一時寄付金20円を寄付したいので受取にくるようにとの書簡が届き、17日には午前10時に本郷弥生町

の桜井女塾を訪問し、礼拝に列席して桜井先生の紹介で、同院の現状と「東京運動」の目的を説明したところ、新賛助員 2 人と 2 円の寄付金が寄せられた。

18 日は、1 月 9 日頃に職員となった佐久間武男事務員が応援に来たように、先の山陽堂主人の逸見に賛助員申込書と冊子『同院』を持参したところ、横浜市の貿易商今井宗三郎より 10 円の一時寄付と賛助金 1 円を受け取ることができた。また、逸見は、得意先に「賛助員募集」を依頼する手紙を 400 通送付し、多数の賛助員募集に協力してくれた。

19 日は、本所区外手町の賛助員渡辺浦吉を訪問すると、同家の美術印刷所で働く同院卒業生 1 人の雇入の申出があった。翌 20 日は、日本橋区と京橋区の有力者を訪問し、賛助金 24 円 20 銭と一時寄付金 6 円を集める「大勝利」となった。特に、福田錠二の紹介で賛助員となった田中文次郎の尽力により、勤務先の大沢株式会社では、主人の大沢幸次郎とその家族や親戚 7 人および同商店の店員 22 人や知人 4 人の計 33 が賛助員に入会し、一時寄付金 6 円を取次いでくれた。

22 日は、渋沢栄一男爵より 30 枚の賛助員申込書の依頼があったので、同家を訪問し持参したところ、家族 7 人が入会し、関係者へも勧誘してくれることになった。

23 日は、上野駅より同院の慈善箱の開箱の件で連絡があったので、午前中に出頭すると、慈善箱が投入口まで一杯になり、駅長室で立合って開箱した。すると、銅貨、銀貨、小銭が 8 円 60 銭 6 厘入っており、前回の分と合わせると 10 円 60 銭 6 厘になっていた。

25 日は、麹町区土手 3 番町の大日本女学会を訪問し、山沢俊夫に面会して貴学会の雑誌『をんな』の付録として「岡山孤児院賛助員申込書」を掲載してくれたお礼と掲載料の支払いを申し出たところ、14 円の掲載料は無料とし、「同院申込書」12 枚を受け取っていた。ここで注目したいのは、この『をんな』という雑誌の存在で、『同』は 1901 年 1 月に女性向け

の通信教育を始めた大日本女学会が発行した雑誌で、この雑誌に「同院賛助員申込書」が掲載されたため、全国各地の向学心を持つ若い女性に賛助員募集を宣伝することができ、新しい階層の全国規模の募集対象を獲得したと理解ができたことである。その結果、「其反響として数多賛助員申込」があった。その内容は後述（9頁）するが、ここでは『同新報』第53号の1面には『をんな』第1号の目次が広告として掲載され、その後も掲載が続いたことを付け加えておく。

26日は、夕方帰宿すると福島県福島町の地方委員長谷川裕牧師から依頼のあった孤児が、午後4時に上野駅に着いたということで迎えに行き、岡山孤児院へ送院する時まで東京出獄人保護所の原胤昭に委託した。また、この孤児の経歴等が報知新聞に紹介され、翌27日は貴族院議員の秋月新太郎から10円の一時寄付金があった。

以上が、2月中の東京出張所の大西、宮崎、佐久間の3人の賛助員募集の具体的な活動であった。ただし、ここで補足しておきたいのは、2月14日大西は、先の福島県と長野県の孤児2人を伴い、午後4時10分の急行で帰院していたため、2月14日からは不在であったことである。また、この不在中の15日前後に前述したように佐久間武男が岡山孤児院を出発して上京し、18日山陽道堂主人の逸見に賛助員申込書等を持参したことで、東京出張所の職員は2人体制が維持されていた。

さらに、帰院した大西は、翌15日朝集会で「東京談」を報告し、石井院長、炭谷小梅、光延義民と夕食を共にした。その夜石井院長は、創立20周年までに20万円の基本金募集を目標に掲げ、外部運動は音楽幻燈隊を基本金募集隊とし、賛助員募集は同員宅を訪問する運動とすることを考えた。19日は、石井院長と大西により「東京運動相談会」が実施され、「勢力を増加」して、1年間継続し、最初は各団体の募集から始め、各区の「公民者の夫人」を調査し、地方の募集は各雑誌を利用し、東京市内では新聞を活用し、職員も増員することを定めた。翌20日も相談会を実施し、

必要に応じて渡辺万吉郎と草地磯吉も上京させ、東京出張所として1軒家を借用することにした。

そして、大西は、帰院後静養して「東京運動」中の疲労が回復したので26日の夜行で再度上京し、東京市で賛助員募集は大西、宮崎、佐久間の3人体制で実施した。

このような運動の結果、2月中の賛助員募集では308円88銭もの賛助金が集り、1月と同様に多額の寄付金を集めることができた。また、2月中の新賛助員(1年間1円)の「登簿」には東京市が258人(1月入会26人、2月入会232人)で、これに横浜市の10人を加えると268人となり、現賛助員からの集金(1年間1円)も東京市286人、横浜市7人の計293人あり、これらの賛助員からの集金の成果であることが理解できた。ただし、先の集金額と1年間1円になった新賛助員と現賛助員の合計人数は一致しなかった。

(4) 3月、4月の賛助員募集運動の内容

3月に入ると、9日に渡辺万吉郎が、「東京運動」を応援するため、午後1時26分の急行で上京し、その直後の11日には、宮崎が福島町の地方委員長谷川裕牧師より依頼のあった孤児1人を同伴して帰院した¹⁸⁾。このため、東京出張所での賛助員募集運動は、大西、佐久間、渡辺の3人で実施することになった。そこで13日石井院長は司令官大西、副官佐久間と渡辺の3人体制で「本年中運動」をするように指示した。

その結果、3月中に226円70銭の賛助金を集めることができ、その出金者の内訳は新賛助員(1年間1円)が155人(2月31人、3月124人)で、現賛助員も東京市218人、横浜3人の計221人(1年間1円)から集金できた。ただし、先の集金額と1年間1円になった新賛助員と現賛助員の合計人数は一致しなかった。また、このなかには、前述した大日本女学会の紹介や賛助員総代の山脇ふさ子、阿部優子、浜尾作子等の紹介も含ま

れていた。

そして、4月も大西、渡辺、佐久間の3人体制で、賛助員募集運動を実施し、4日には大西より毛利男爵夫人他1人よりの寄付金12円と3月決算残余金100円が送金され、10日には渡辺から横浜市で集めた賛助金と臨時寄付金が送金されて来た。19日には、大西より、石井院長が徳富猪一郎を通して松田文部大臣に依頼していた、佐賀県、長崎県、熊本県での音楽幻燈会開催に協力を求める同大臣から3県知事への添書が送られて来た。21日には、大西より禁煙を実施するとの書面が届き、同日と23日の祈祷会では東京運動等のために祈祷した。24日には、渡辺が帰院し、27日には大西から書面が届き、石井院長はそれを読んで「感謝」していた。この「感謝」の内容は不明だが、東京出張所の職員は大西と佐久間の2人体制になった。

そして、4月の賛助員募集運動の成果は25円60銭と少なかった。ただし、新賛助員（1年間1円）は134人で、このうち横浜市が54人（3月等27人、4月25人）、東京市が111人（同32人、同79人）、横須賀町1人であった。また、現賛助員からの集金は60人で、横浜市34人、東京市25人、横須賀町1人であったので、計237人から1年間1円の賛助金を集めたとすると237円に達していたことを付け加えておく。

(5) 5月、6月の賛助員募集運動の内容

5月になると、2日岡山孤児院に「スガ、スミヤゼヒヨコセ」との電報が届き、9日病弱の身を押し炭谷小梅が同院の吉田いの看護婦と共に上京したが、これは同院のために12日に開催される東京婦人慈善談話会に出席するためであり、翌10日に「無事着」の来電が届いた¹⁹⁾。そして、この東京婦人慈善談話会の開催については、『報知新聞』で次のように紹介された。その記事によると、大西が、鳩山春子夫人、三輪田真佐子、女子学院長の矢島揖子、東京婦人矯風会頭の潮田千勢子などに熱心に依頼し

開催したものであった。つまり、先のメンバーは、同院の「賛助員募集趣意書」の賛助員総代のなかに含まれていた婦人たちであった。また、同慈善談話会は、12日神田区の錦輝館で開催され、その内容は鳩山夫人が開会の辞を述べ、矢島女子学院長が「重み」ある話で「男子傍聴席」を納得させ、三輪田真佐子は欠席のため「談話体の草稿」が代読され、潮田会頭の講話と続いた。その後、米国から来日した新聞通信員のマーカット嬢が「日本の話」をし、同嬢は岡山孤児院の事を聞いて同情を表し近日中に同院を訪問すると述べていた。その後、東京看護婦会の大関和子（和）が「自分の主義」と題する話をし、最後に炭谷小梅が岡山孤児院の石井十次院長の書生時代からの「実見談」を紹介すると「男女の聴衆を泣かせ」て閉会した。その結果、先の「涙」に導かれ賛助員と寄付金が多数集ったと記していた。そして、同慈善談話会は、盛会となったようで、同院へ「ダイセイカイ」の電報が届いた。

また、同慈善談話会には、大原孫三郎も同行し出席したが、炭谷より一足先に帰岡し、18日岡山孤児院を訪れ、同会の内容を報告し、「東京運動」について所感を述べていた。

さらに、先のマーカット嬢は、岡山孤児院に同情して14日に築地で幻燈会を開催し70円を集め、17日には横浜市のフェリス女学校で外国人のみの集会を開催した。この集会には、炭谷、大西、佐久間が出席し、100人程の出席者を前に、同女学校の校長の挨拶、続いてマーカット嬢からは「キリストの悲劇」の幻燈と、岡山孤児院の11枚の幻燈を上映したところ60余円の寄付金が集った。そして、24日炭谷と吉田は、東京市の孤児2人を同伴して帰岡した。

また、6月5日には、大西と佐久間が東京市の孤児1人を引率して帰院し、職員による東京出張所での賛助員募集運動が終了した。手元の資料から終了した理由を確認できないが、石井院長の指示であったことは明らかだが、当時石井院長は、5月4日から6月13日まで音楽幻燈隊を引率し、

長崎県内と佐賀県内を巡回中であり、この間に東京出張所での職員による賛助員募集運動の終了を指示したとみる。そして、6月10日発行の『同院新報』第56号の1面で、大西義一名義で「謹告」を掲載し、「深厚なる御同情より御親切に御指導」を受け、多数の賛助員と多額の寄付金が与えられたことに感謝し、今回院務の都合により帰院するが、遠からず上京するという主旨の離任報告をした。また、この「謹告」の上部には、地方委員の潮田千勢と福島四郎名で、東京出張所の「事務所移転」の広告も掲載され、神田区小川町41番地の婦女新聞社へ移転すると報告していた。このため、大西と佐久間が帰院した後の東京出張所での賛助員募集等は、婦女新聞社内に事務所を設け、先の2人の地方委員が引き継いだことが分る。つまり、東京市等での賛助員募集等の運動は、1900年5月10日に『婦女新聞』を創刊した福島四郎と同年12月の「賛助員募集趣意書」の賛助員総代の1人であり、東京婦人矯風会や東京婦人慈善会等で活動していた潮田千勢子が引き継いだのであった。

このため、東京市での職員による賛助員募集運動は6月初旬で終了し、その結果5月中に107円80銭、6月に83円60銭を集めていた。また、5月中の新賛助員（1年間1円）は49人（4月12人、5月37人）で、現賛助員（1年間1円）の出金者は97人であった。さらに、6月中の新賛助員（同）は13人（5月8人、6月5人）で、現賛助員（同）の出金者は東京市52人、横浜市1人、横須賀町1人であった。また、大西は6月22日今回の募集運動の決算を実施し、170円60銭と報告していた。たぶん旅費、宿泊費等を差し引いた収益が170円60銭であったとみる。

なお、前述したマーカット嬢は、6月15日岡山孤児院を訪れ、20日まで滞在し、石井院長、大原孫三郎と面談し、16日、17日には同嬢の幻燈演説会が開催された。同嬢は、米国の200の新聞社と75の雑誌社の囑託通信員として、ミス・アツカルマンと共に世界を漫遊中で、日本には1年間滞在し、今回岡山孤児院のために、ドイツのオバラマゴーで10年に一

度開催される「基督一代記の悲劇」の幻燈を上映し寄付金を募集することにした。そこで、岡山基督教婦人会が発起人となり、岡山基督教会会堂で16日と17日に開催し、16日は炭谷小梅が司会、ペテー夫人が開会の辞を述べ、吉岡哲夫の通訳でマーカット嬢により幻燈の上映と演説が実施された。翌17日は、青木要吉の通訳で実施され、2日間で1,700人以上の參觀者が集まり、その結果、収入が110円38銭9厘、支出が10円38銭9厘となったため、岡山孤児院に差し引き100円を寄付することができたことを、付け加えておく。

(6) 12月の賛助員募集運動の内容

そして、12月から大西が東京市等での賛助員募集運動を再開することになる²⁰⁾。大西は、7月から水戸市等での音楽幻燈隊の巡回運動に参加し、8月7日に帰院し、その後は在院していたようであるが、その動向が十分確認できなかったが、11月14日石井院長と大西他4人による感話会で「三府運動」が決定され、大西は30日午前10時の急行で東京市での賛助員募集に出発した。また、このことは、『岡山孤児院新報』第62号(1901年12月10日)の「特別廣告」に掲載され、同院東京事務所が、同市神田三崎町3丁目婦女新聞社内に設けてあるので「御用の方は御一報」くださいとあった。12月7日と10日に届いた大西からの報告によると、横浜市での「運動」に着手したとのことで、13日と16日の通信も横浜市で活動し、21日の通信には京浜賛助員芳名録に脱落があると報告した。そして、翌1902(同35)年1月も引き続き「運動」を続けていたが、12月中に集めた賛助金は、東京市で30円10銭、横浜市で32円となり、新賛助員も20人募集していた。

このように、今回の職員による東京市での賛助員募集運動は、1月から6月と12月の7ヶ月間実施した結果、新賛助員を計813人募集し、現賛助員計851人(12月は記載なし)から集金し、表7²¹⁾の東京出張所の欄の

1900年と1901年の岡山孤児院の賛助員の全国的な
支援ネットワークシステムの構築の実態（中篇・菊池）（131）100

表7 1月から12月までの職員による賛助員募集の状況とその集金額

	1月中	2月中	3月中	4月中	5月中	6月中	7月中
東京出張所	362円900 新184、現151	308円880 新258、現268	226円700 新155、現221	25円600 新134、現60	107円800 新49、現97	83円600 新13、現54	
集金人取扱	79.200	70.350	37.350	117.250	73.300	63.700	79円050
佐藤惣吉 佐藤惣吉 佐藤惣吉 佐藤惣吉 佐藤惣吉	妹尾7.00		撫川20.200			撫川13.600 妹尾8.000 備中4.800 福山19.750	尾道4.800 福山21.600
宮崎兵吉郎 宮崎兵吉郎 宮崎兵吉郎 宮崎兵吉郎	西大寺5.700 久世10.200 勝山2.00	玉島10.400 多度津12.800	久世19.100 勝山3.700	西大寺5.000 玉島3.300 多度津と 普通寺17.0	玉島3.100 久世11.500 勝山3.800 多度津10.700	西大寺7.000	
草地磯吉 草地磯吉 草地磯吉 草地磯吉		落合町0.300 西川1.500					久世11.300 作州0.350
入江大九郎						鳥取8.700	今治15.250
渡辺万吉郎 渡辺万吉郎	倉敷8.800	摂津1.200 福山5.600	倉敷0.300			6.700	玉島2.800 多度津10.000
宮崎利平	倉敷11.400						
岡山孤児院直接	53.500	73.546	77.450	73.100	45.900	44.400	51.525
	8月中	9月中	10月中	11月中	12月中	合計	
東京出張所				12月新20	東京30円100 横浜32.000	1,177円580 新813、現851	
集金人取扱	66円585	66円550	67円450	62円120	58.350	841.255	
佐藤惣吉 佐藤惣吉 佐藤惣吉 佐藤惣吉 佐藤惣吉	西大寺5.100	撫川14.300 妹尾4.800 茶屋5.600 玉島5.500 多度津9.400	西大寺4.600 府中1.100 新市11.300 福山20.450		府中16.100 新市4.000 福山16.000 多度津11.800	393.100	
宮崎兵吉郎 宮崎兵吉郎 宮崎兵吉郎 宮崎兵吉郎						125.300	
草地磯吉 草地磯吉 草地磯吉 草地磯吉	久世10.950 勝山4.000 作州等1.20		久世10.400 勝山2.800		久世10.700 勝山2.700 津山24.730 江与味0.200	81.130	
入江大九郎			高田11.300			35.250	
渡辺万吉郎 渡辺万吉郎		玉島等4.000			京都23.000 住吉8.300	70.700	
宮崎利平						11.400	
岡山孤児院直接	23.720	38.640	21.510	32.020	56.740	592.051	

<注> 各市町村名は、市町村を省略した。東京出張所の新は新賛助員からの集金人数、現は現賛助員からの集金人数の略である。（『岡山孤児院新報』第52号から第63号より作成）

ように合計 1,177 円 58 銭の賛助金を集めることに成功した。このため、1901 年の賛助金総額 (7,803 円 18 銭 6 厘) の約 15.1% を占め、かつ岡山孤児院の歳入 (29,665 円 75 銭 6 厘) の約 4.0% に達していた。

なお、宮崎利平は、前述したように 3 月 12 日に東京市での賛助員募集運動から帰院し、26 日に岡山県の福田新田村、早島町、茶屋町での音楽幻燈会に同行して帰院し、4 月 8 日の朝集会で茶屋町での「運動」を報告した。25 日には、長崎市、佐賀市、佐世保村、唐津町での同幻燈会に同行し、6 月 15 日に帰院したが、19 日石井院長に諭されて辞表を提出し、院役員会での宮崎の退職が承諾されたという経過を付記しておく。

3) 職員による岡山県内等での賛助員募集

職員による岡山県内等の賛助員募集活動は、昨年から引き続き宮崎兵吉郎、佐藤惣吉が担当し、その後 1 月 29 日同院の支援者の渡辺万吉郎が倉敷町より来院し、外部運動員として働くことになり、翌 30 日には、草地磯吉も外部運動員として働くことになり、賛助員募集活動が強化されていくことになった²²⁾。

ここでは、渡辺を除く先の 3 人の外部運動員の岡山県内等での個人別の同員募集活動をまとめることにする (表 7 中)。佐藤惣吉と宮崎兵吉郎は、昨年 12 月 19 日に福山町での賛助員募集に出発し、佐藤は 14 円 70 銭、宮崎は 37 円 30 銭を集金して帰院し、27 日からは佐藤が倉敷町で賛助員募集を実施し 12 円 20 銭を集めていた。1 月に入ると、佐藤は妹尾町で 7 円、2 月は福山町で 16 円 40 銭、3 月は撫川村で 20 円 20 銭と福山町で 24 円 30 銭を、4 月は同町で 24 円 90 銭を集めていた。そして、5 月は、2 日に福山町に出張して 6 日に帰院し 23 円 20 銭を集金し、30 日からは備中から福山町等で賛助員募集を実施し、撫川村で 13 円 60 銭、妹尾町で 8 円、備中で 4 円 80 銭、福山町で 19 円 75 銭を集めていた。また、7 月は、8 日から 11 日まで福山町等に行き、福山町で 21 円 60 銭、尾道市で 4 円 80 銭

を、8月は西大寺町で5円10銭、福山町で29円50銭を集金していた。

9月になると、13日に香川県多度津町から帰院したことが確認できたことから、同町で9円40銭を募集し、途中の撫川村で14円30銭、妹尾町で4円80銭、茶屋町で5円60銭、玉島町で5円50銭を集めていた。また、26日には、広島県府中町へ出発し、10月4日に同町で賛助員募集活動を実施し、15日には尾道市から報告が届いていたことから、福山町で20円45銭、新市町で11円30銭、府中町で1円10銭を募集し、他に西大寺町で4円60銭を集金していた。

その後は、11月8日に尾道市へ行き、尾道市で23円、福山町で22円を集金し、12月11日には府中町に出発したことから、福山町で16円、新市町で4円、府中町で16円10銭、多度津町で11円80銭を募集していたことが確認できた。

一方、宮崎兵吉郎は、1月に西大寺町で5円70銭、久世町で10円20銭、勝山町で2円を募集し、31日には玉島町から高松市、多度津町、丸亀町方面に行くことになっていたため、2月に玉島町で10円40銭、多度津町で12円80銭を集めていた。3月は、久世町で19円10銭、勝山町で3円70銭を集め、4月は西大寺町で5円、玉島町で3円30銭、さらに、多度津町と善通寺町で17円を募集した。5月3日から8日までは久世町で11円50銭、勝山町で3円80銭を集め、玉島町で3円10銭、多度津町で10円70銭を集金した。6月も西大寺町で7円を集めたが、同月19日に息子の宮崎利平が辞職したため、父親の兵吉郎も退職したようであった。

そして、1月30日に就職した草地磯吉は、地元の西川村で賛助員募集を行い1円50銭と落合町で30銭を募集し、2月11日に帰院したようで、28日には八浜村より帰院したが、これは3月4日に、音楽隊のみが同村へ出張するための事前打ち合せで行ったようである。また、3月4日は、15日から岡山市で開催する音楽幻燈会の準備のため同市内で活動していた。そして、7月23日の相談会では宮崎兵吉郎の後任として賛助金募集

担当と決定したが、6月まで動向は判明していない。

つまり、7月10日からは、久世町や作州に行き、前者で11円30銭、後者で35銭を集めて16日に帰院した。8月26日は久世町から、29日は大庭村より報告があったため、久世町で10円95銭、勝山町で4円、作州等で1円20銭を集金していたことが、10月28日は勝山町から報告があったため、久世町で10円40銭、勝山町で2円80銭を募集していたことが理解できた。また、11月29日には、津山町へ行き、新賛助員50人と現賛助員50人を復帰させて24円73銭を集め、12月7日に帰院し、14日からは津山町から久世町、勝山町に行き、21日に帰院し、久世町で10円70銭、勝山町で2円70銭、津山町で24円73銭、江与味村で20銭を募集した。

そして、岡山県内等での賛助員募集活動で最も注目したいのは、岡山市内の賛助金募集（集金人取扱）が、1月79円20銭、2月70円35銭、3月37円35銭、4月117円25銭、5月73円30銭、6月63円70銭、7月79円5銭、8月66円58銭5厘、9月66円55銭、10月67円45銭、11月62円12銭、12月58円35銭と、毎月多額の賛助金を集めていたことである。ただ、この多額の賛助金を毎月だれが集金したかについては、手元の資料では「集金人取扱」とあるだけで個人名が判明しなかった。そこで筆者は、この「集金人」は、宮崎兵吉郎、佐藤惣吉、草地磯吉であったと判断した。つまり、この3人は、前述したような、岡山県内等の町村に出張して賛助員募集を実施していたが、これらの各町村への出張期間以外の期間は、岡山市内で同募集を実施していたと判断したのである。たとえば、草野は、前述したように、4月から7月初旬までの活動は判明しなかったが、この期間は岡山市内で賛助員募集活動を実施したと理解した。

さらに、以上のような、3人職員の賛助員募集活動における集金額をまとめると、多少の欠落はあると思うが表7中のようになり、佐藤惣吉が計393円10銭、宮崎兵吉郎が125円30銭、草地磯吉が81円13銭となり、

合計 599 円 53 銭となった。また、この 3 人は、この他に「集金人」として岡山市内でも賛助金を募集し、その 1 月から 12 月までの合計が 841 円 25 銭 5 厘となったため、総計 1,440 円 78 銭 5 厘を集めていたことになる。そして、この総計 1,440 円 78 銭 5 厘は、1901 年の賛助金総額（7,803 円 18 銭 6 厘）の約 18.5%に達し、かつ岡山孤児院の歳入（29,665 円 75 銭 6 厘）の約 4.9%を占めていた。

4) 職員による関西や四国地方での賛助員募集

岡山県内等より遠方の関西方面の賛助員募集活動を担当したのは、入江大九郎と渡辺万吉郎であった²³⁾。石井院長は、1 月 5 日大阪市での 賛助員訪問運動、 賛助員募集、 孤児救済、 広告取次を「静思」し、再度大阪市での活動を決意した。このため、昨年 12 月中に神戸市で賛助員訪問運動を実施し、同市で結婚して帰院していた入江が同日午後 1 時 26 分発の急行で大阪市に出発し 等の活動を実施した。そして、2 月 12 日に帰院していたようで、朝集会で「運動報告」を行った。3 月 4 日には、岡山市で開催する音楽幻燈会の宣伝活動を実施し、4 月 3 日には、3 月 30 日と 31 日に早島町で開催された音楽幻燈会で募集した寄付物品を送院して来た。そして、4 月 11 日には、賛助員募集のため明石町へ出発し、その後大阪市でも募集活動を行い 10 余人の新賛助員を集めていたが、26 日に所持品の全てを盗難に会ったとの報告があり、29 日帰院した。

5 月 1 日からは、音楽幻燈隊と長崎市や佐賀市への巡回運動に出発し、29 日佐世保町から早目に帰院した。これは、入江が徴兵検査後に実施される教育演習に 2 週間参加するため、翌 31 日鳥取市に出発した。すると 6 月 2 日同市で賛助員募集運動に着手したとの通信が届き、16 日 8 円 70 銭を集め、16 日に帰院した。

21 日は、姫路町の出身者が病気となり見舞に行き、7 月 2 日からは今治町での賛助員募集運動に出発し、19 日帰院し臨時寄付金 15 円 25 銭を募

集した。27日には、故郷の美作より帰院し、音楽幻燈隊の水戸市での運動の応援に出発した。その後同隊と前橋市、足利町を経て、北信越地方の市町村を巡回し、高田町では11円30銭を集め、11月8日に敦賀町から帰院した。19日からは西宮町、尼ヶ崎町での音楽幻燈会の先発員として出発し、23日家族と帰院した。

このように、入江は、7月まで関西（鳥取市を含む）での賛助員募集を実施し、8月からは音楽幻燈隊の巡回運動に従事していた。

次に、渡辺万吉郎は、1月29日に外部運動員として働くことになり、その前に地元の倉敷町で8円80銭を集め、31日から福山町での賛助員募集に出発し、5円60銭を募集し2月2日に帰院した。4日からは大阪市方面への賛助員募集に出発し、25日堺市へ移動し、摂津等で1円20銭を集めて3月1日に帰院し、地元の倉敷町で30銭を集めた。9日には、前述したように上京して東京市等で同募集運動を実施し、4月24日に帰院した。翌25日には、渡辺の歓迎会が開催され、その後、故郷の倉敷市での同募集に着手した。

そして、28日から各地の鉄道の駅に設置された慈善箱の開封と集金の外部主任となり、5月3日関西方面の慈善箱の集金に出発した。14日に帰院し、故郷倉敷町に帰り18日大原孫三郎と一緒に帰院した。また、再度帰郷し24日に帰院し、25日から九州鉄道の各駅の慈善箱の開箱に出発し、26日広島市、28日徳山町、31日からは音楽幻燈隊に合流し物品募集員となり、6月26日に帰院し6円70銭を持参した。7月10日からは玉島町（2円80銭）から讃岐方面に渡り、賛助員募集を行い、14日、16日、18日は多度津町（10円）、19日は丸亀町、20日、21日は高松市より来信があり、22日帰院した。このうち、14日の通信では、多度津町の地方委員宮崎清吉宅を訪問し、地元の孤児収容や賛助員募集の話をし、情報交換を実施していたことが確認できた。24日からは中国鉄道沿線の各駅の開箱に出発し、8月1日倉敷町より帰院し、3日からは関西鉄道沿線の各駅の

開箱に出発し、7日には三重県上野駅より通信があり、9日に東京駅に着き、前橋市で音楽幻燈会を開催した後の同隊一行と合流して活動した。そして、9月10日には、松本町での音楽幻燈会で3人の孤児を収容した等の通信があり、12日には375円余を岡山孤児院に送金し、13日先の孤児3人を伴い帰院したので、夜歓迎会が開催された。19日には、倉敷町に帰郷し静養中の渡辺に電報が届き、23日同町と玉島町よりの寄付金4円持参して帰院し、翌24日午前1時12分の列車で富山市の音楽幻燈隊と合流し、高田町での先発員として活動し、10月23日孤児1人を伴い帰院した。11月15日から慈善箱の開箱と賛助員募集のために京都市に出発し、12月7日慈善箱の寄付金25円52銭4厘、賛助金23円、住吉で8円30銭を募集し帰院した。

このように、渡辺は、岡山孤児院で1月29日から外部運動員として働くようになり、2月から大阪市方面で賛助員募集を実施し、3月から東京市で同募集運動に参加し、4月下旬からは、九州、中国、関西の鉄道沿線の慈善箱の開箱と集金を実施し、8月中旬から音楽幻燈隊の活動に参加し、11月中旬から12月初旬までは京都市等の慈善箱の開箱と賛助員募集を実施していたことが確認できた。

以上が、職員による賛助員募集活動で、昨年11月から本年6月初旬までと12月は、東京市で賛助員募集運動を集中的に実施し、非常に高い成果を上げていたことが確認できた。同時に、岡山市内および岡山県内の主要町村と近隣の広島県や香川県及び関西方面の主要市町を巡回し、地方委員と連携しながら現賛助員宅を個別に訪問して集金すると同時に、彼らの紹介等により新賛助員を募集する、直接かつ積極的な賛助員募集活動を実施していたことが確認できた。また、同員募集活動を担当した職員は、音楽幻燈隊での活動にも参加し、臨機応変に活動していたことも判明した。

5) 音楽幻燈隊での新賛助員募集

音楽幻燈会での新賛助員募集は、昨年より引き続き実施され、同幻燈会では岡山孤児院の歴史と現状を報告する幻燈を上映し、その中で新賛助員の募集にも取り組んでいた。このような、同幻燈隊の運動内容は別稿でまとめるので、その詳細は省略し、開催月日、開催地、寄付金収入、新賛助員数（新賛）、現賛助員の集金数（現賛）および各地の賛助員募集と賛助金集金等を担当する地方委員の就任状況をまとめると表 8²⁴⁾のようになる。つまり、1901 年は、3 月から岡山県内で 4 ヶ所と、5 月から 6 月初旬は長崎市、佐賀市、佐世保村、唐津町を、7 月下旬から 10 月までは、水戸市から前橋市、足利町へ、さらに北信越地方の主要 17 市町村を巡回し、12 月は兵庫県の 3 町で開催し、その中で新賛助員募集と、賛助金の集金等を担当する地方委員が就任した。このうち新賛助員募集で多数の入会等があったのは、長崎市が新賛助員 118 人、現賛助員 28 人、佐世保村が新賛助員 124 人、金沢市では新賛助員 145 人であった。また、金沢市では、第 4 高等学校内に学生有志が次のような掲示文を掲げて、「孤児院将来の為賛助員募集」に尽力していた。

岡山孤児院維持の妙法は三厘三毛にありと聞く希くは博愛義侠なる諸士
奮つて賛助員に御加盟あらんことを

- 一、賛助金は地方委員之れを集金す
- 一、賛助員には毎月發刊の孤児院新報を呈す
- 一、賛助員は毎月金拾錢宛寄附せらるべし

北條時敬、杉森此馬、坂口重一、秋月致、小島誠造、松扉、傳法
輪戒淨、島本愛之助、藤森忠一郎（『岡山孤児院新報』第 62 号）

また、発起人中の藤森忠一郎、秋月致、坂口重一、島本愛之助はたぶん
12 月に新地方委員に就任し、12 月の賛助金として藤森が 7 円 20 銭を送金

表 8 1901年の音楽幻燈会の開催概要と新賛助員募集等と新地方委員

開催日	開催地	寄付収入	新賛	現賛	新地方委員氏名
3/15,16,17	岡山市	1,669.336	31人	1人	
3/26,27	岡山県 福田新田村	58.085			
3/30,31	岡山県 早島町	181.011	26	4	溝手保太郎
4/2,3	岡山県 茶屋町	100.895			
5/6,7	岡山県 長崎市	1,522.282	118	28	大島翼、洪恒太郎、佐々木辰三
5/14,15,16	岡山県 佐賀市	741.950	30		西牟田新八、村田虎吉郎、豊増はじめ、 神崎よし子、久本吉次
5/27-30,6/2	岡山県 佐世保村	1,591.453	124		二木廉夫、川浪荘一、松尾良吉、 市村正太郎、富田等平、太田九郎三郎
6/9,10	岡山県 唐津町	666.350	27		麻生ぎん、佐藤林賀
6/24,25	岡山県 松山市	105.861	42		祝田米太郎、畑とも子、中西徳、齊所功
7/27,28	茨城 水戸市	286.373	6		松井久吉、伊藤利男、豊山英雄、 高谷祐二
7/30,31	茨城 水戸市	98.334	10		高谷郁太郎、松井久吉、藤田順吉
8/4,5	群馬 前橋市	401.100			高橋源之助、杉村泰助
8/12,13	栃木 足利町	236.150	10		石川高吉、初谷豊作、森田金之助、 鈴木繁蔵
8/19,20	長野 軽井沢村	343.010			
8/22,23	長野 上田町	411.690	26	4	河合操、瀧沢儀兵衛、重田助二郎
8/27,28	長野 長野市	471.917	69		山路彌吉、山本繁子、松村忠雄、 小木普庄吉
9/2	新潟 浅間村	36.600			
9/3,4,5	新潟 松本町	522.566			
9/11,12	新潟 新潟市	640.249	5		大橋正吉、大宮季貞、谷資敬、 諸星茂吉、高橋辰五郎
9/16,17,18	新潟 長岡町	802.320	23		伊東虎太、山羽協一、木村喜博次、 渋谷善作
9/20	新潟 柏崎町	130.000	7		太刀川寅之助、内藤久實、武藤喜一、 品川豊治
9/24,25	新潟 高田町	554.107	46		倉原源治、倉石昌吉、八田久作、荒木 信実、斉藤文吾、頼尾原始、杉本直方
10/4,5	富山 富山市	555.015	17		戸田忠厚、谷井もと子、根岸貴、 北村竹四郎
10/12,13	富山 高岡市	414.962	14		私立教育会
10/19,20,21	石川 金沢市	652.385	145		北国青年会、斉藤音作、水登勇太郎、 森岡謹吾、藤森忠一郎、秋月致、 坂口重一、島本愛之助
10/26,27	福井 福井市	357.410	27	1	高田とし子、山田ひさを
10/30,31	福井 敦賀町	252.992	10		池見栄吉、宮本祭、人見宜安
12/8,9	兵庫 西宮町	317.145	12		岡田藤吉
12/11,12	兵庫 尼ヶ崎町	116.655			中城恒三、小森純一、小島敏衛
12/16	兵庫 御影町	247.970	6		折島伊蔵、吉田亀之助
10/26,27	福井 福井市	357.410	27	1	高田とし子、山田ひさを
10/30,31	福井 敦賀町	252.992	10		池見栄吉、宮本祭、人見宜安
12/8,9	兵庫 西宮町	317.145	12		岡田藤吉
12/11,12	兵庫 尼ヶ崎町	116.655			中城恒三、小森純一、小島敏衛
12/16	兵庫 御影町	247.970	6		折島伊蔵、吉田亀之助

<注> 新賛は新賛助員数、現賛は現賛助員集金数の略。

(『岡山孤児院新報』第46号から第63号他より作成)

してきた。

さらに、7月27日、28日の水戸上市の同幻燈会では、27日に賛助員申込はがきを94枚、28日は41枚配布したことが確認でき、同会の開催時に会場で希望者に賛助員申込はがきを配布して、新賛助員を募集していたことが再確認できた。そして、8月6日には、同市の松井久吉地方委員からハガキが届き、三新聞、青年同志会、婦人会等が発起人となり、賛助員募集を実施し、会場で140余枚の申込書を配布したので、発起人の加入者と合わせると200人程の新賛助員が集る見込があると報告して来たことも確認できた。

このため、1901年の音楽幻燈隊による巡回運動では、賛助員の少ない北関東や北信越の主要市町村で、同幻燈会を開催して新賛助員募集と地方委員の就任により、賛助員の全国的なネットワークシステムが北関東や北信越地方に拡大し、その拠点（結節点）となる地方委員を開拓し、新賛助員の増員にも貢献していたと判断できた。

6) 地方委員による賛助金集金と新賛助員募集等

地方委員の役割は、地元の担当地区の賛助員からの毎月および1年間分の賛助金の集金と『岡山孤児院新報』の配付、新賛助員や臨時寄付金の募集、地元の孤貧児の同院への収容依頼等であった。そして、多少欠落もあるとみるが1901年の道府県における市町村別の地方委員数をまとめると表9²⁵⁾のようになり、37道府県の144市区町村に341人が存在するまでに増加し、同院の賛助員のネットワークシステムの拠点が全国に拡大していった。特に、表9のゴチック体の市町村の大半は、前述した音楽幻燈隊が巡回した市町村であり、これらの市町村においてその拠点が開設されていくことが確認できた。

そこで、次に先の144市区町村に341人の地方委員が、賛助金集金と新賛助員募集等を実施した実績をまとめると表10(巻末資料190頁)²¹⁾のよ

表9 1901年現在の各道府県の市町村別の地方委員数

道府県名	市区町村別地方委員数で、ゴシック体は1901年の新地方委員、斜字の同体は地方委員の計である。
岡山県	金川村1、香登村2、藤戸村1、下津井町2、吹上村1、鴻村1、撫川村1、倉敷町1(1)、笠岡町1、高梁町1、新見町1、勝山町1、落合町1、津山町4、西川村3、弓削村2、早鳥町1、有漢村1、計18市町村27人
北海道	札幌区5、小樽区3、函館区3、岩見沢町1、旭川町4、滝川町2(1)、荻伏村3、浦河町2、佐瑠太村1、上下村1、門別村1、計11区町村27人
青森県	青森市1、藤崎村2、弘前市4、計3市村7人
福島県	喜多方町1、福島町2、計2町3人
茨城県	水戸市8、計1市8人
栃木県	宇都宮市4、足利町4、計2市町8人
群馬県	前橋市2、計1市2人
埼玉県	大宮町1、計1町1人
東京府	東京市4(2)、計1市6人
神奈川県	横浜市4、横須賀町2、計2市町6人
新潟県	新潟市5、柏崎町4、高田町3、高城村4、計4市町村16人
長野県	飯田町2、長野市4、上田町3、計3市町9人
富山県	富山市4、高岡市1、計2市5人
石川県	金沢市8、計1市8人
福井県	福井市2、敦賀町3、計2市町5人
静岡県	静岡市3、沼津町2、計2市町5人
岐阜県	岐阜市1、大垣町2、計2市町3人
愛知県	名古屋市2、計1市2人
滋賀県	大津市1、八幡町1、彦根町4、長浜町2、計4市町8人
京都府	京都市3、計1市3人
奈良県	奈良市1(1)、計1市2人
大阪府	大阪市2、堺市1、岸和田町2、計3市町5人
兵庫県	神戸市12、三田町1、姫路市1、西宮町1、尼崎町3、御影町1、住吉村1、計7市町村20人
和歌山県	和歌山市2、田辺町1、新宮町3、御坊町1、日置村1、計5市町村8人
鳥取県	鳥取市1、米子町1、計2市町2人
島根県	松江市1、広瀬町1、計2市町2人
広島県	広島市5、鞆村3、尾道市1、福山町2、深津町1、府中町4、新一村2、松永村1、鞆津町2、三原町4、吉舎村1、計11市町村26人
山口県	山口町1(1)、岩国町2、柳井津町2、徳山町1、富海村1、佐波村1、右田村2、三田尻村2、長府村1、下関市5、計10市町村19人
香川県	高松市3、丸亀市2、多度津町3、善通寺村2、坂出町1、淵崎村1、計6市町村12人
愛媛県	松山市2(5)、今治町4、菊間村2、郡中町1、宇和島町2、新居浜町1(1)、八幡浜町1、別子鉱山4、吉田町1、三津浜町1、計10市町村25人
徳島県	徳島市3、川島町1、計2市町4人
高知県	高知市4、安芸町1、本山村2、芳野村1、計4市町村8人
福岡県	福岡市4、若松町4(3)、柳河町2、場内村1、沖端村1、久留米市3(1)、小倉市3、門司市9、計8市町村31人
佐賀県	佐賀市5、唐津町2、計2市町7人
長崎県	長崎市3、佐世保村3、計2市村6人
大分県	中津町1、計1町1人
宮崎県	宮崎町1、延岡町1、細島町1、飫肥村1、計4市町4人

（『明治三十三年六月調岡山孤児院地方委員姓名録』、『岡山孤児院新報』第46号から第64号より作成）

うになり、全ての地方委員が活動していたわけではなかった。そこで、実際に活動していた個々の地方委員の活動実績の内容を次にまとめることにする。その際、地方委員が最も多かった岡山県からまとめ、その後は、北海道から順次九州各県までの個々の地方委員の活動実績の内容を記していくことにする。

(1) 岡山県内の地方委員の活動

岡山県には、表 9 (以下同様) のように 18 市町村に 27 人の地方委員がいたが、実際に活動していたのは、表 10 (巻末資料 190 頁、以下同様) のように 15 町村の 17 人であったことが確認できた。この 17 人の集金等の状況は、吹上村の守屋乾三 (1900 年 4 月に地方委員に就任した。以下 (9) までの各地方委員氏名の後のカッコ内は、地方委員に就任した年月を記載し、就任年月が確定できない場合は地方委員として確認した年月に「以前」を付けた²⁶⁾) が年間 3 回集金して計 6 円を、香登村の溝手文太郎 (1898 年 6 月) が年 3 回で計 19 円 30 銭、同村の武田五郎宇衛 (1899 年 9 月) が年 1 回で 5 円 60 銭、味野村の津田鍛雄 (1900 年 4 月) が年 5 回で 32 円 60 銭、金川村の角田清 (1899 年 7 月) が年 1 回で 15 円 10 銭、藤戸村の津下豊次郎 (同) が年 8 回で 17 円 70 銭および玉島町で年 2 回の 4 円 90 銭、早島町の溝手保太郎 (1901 年 3 月) が年 3 回で 25 円、倉敷町の大原孫三郎 (同年 3 月) が年 5 回で 82 円 40 銭を集金し送金して来た。さらに、笠岡町の浅野富平 (1898 年 10 月) が年 10 回で 19 円 70 銭、津山町の山本桃三 (1900 年 12 月) が年 2 回で 5 円 40 銭、同町の山下徳三郎 (1899 年 11 月) が年 2 回で 10 円、高梁町の伊吹五郎 (1898 年 6 月) が年 7 回で 51 円 10 銭、有漢村の莊三郎吉 (1901 年 8 月) が年 3 回で 10 円 10 銭、勝山町の長谷川春吉 (1899 年 6 月) が年 1 回で 2 円 90 銭、落合村の山田義信 (1899 年 10 月) が年 12 回で 36 円 40 銭、西川村の桑山茂 (1900 年 6 月) が年 3 回で 6 円 30 銭を集金し送金して来た。

これらの地方委員の具体的な活動の一端をみていくと、落合町の山田義信は4月3日に山田の紹介により落合村より貧児1人が入院し、その直後、離縁された母親から謝礼として山田に20銭が贈られたので、「自分がかゝる禮物を受くる筈」がないので、岡山孤児院へ寄付するとの手紙が届いていた²⁷⁾。この手紙から、離縁された母親の我子への思いと山田が地方委員として無償で活動していたことが理解できた。

笠岡町の浅野富平は4月3日に来院し、神戸市の教育品製造店の森谷精一からの寄付依頼を取り次ぎ、15日に水準器など18種類の理科用教育材料が寄贈され、同院尋常高等小学校の教育に役立つことになった。6月21日には、林源一郎と一緒に来院し、11月18日には、白木綿1反の寄付の仲介をしていた。

香登村の溝手文太郎は、香登教会の牧師で最初の地方委員の1人であった。4月20日に同院を訪れ、朝集会で聖書の講義を実施し、6月20日にも同院を訪れ感謝会に出席していたため、来院の時までに集めた賛助金を持参していたとみることができた。

高梁町の伊吹吾郎も、同教会の牧師でやはり最初の地方委員の1であった。5月21日に来院し、6月は上京するため高梁中学校生の磯貝延司が、同町の賛助員へ『同院新報』の配布と賛助金の集金をするを報告した。また、この事が、6月10日の『同院新報』第56号に掲載され、磯貝（表10）から7月に8円40銭、10月7円70銭、12月に4円80銭を集金し送金して来た。ただし、9月と12月は伊吹牧師も集金し送金があったので、2人で担当していたと理解できた。

倉敷町の大原孫三郎は、3月から地方委員に就任し、4月から賛助金の集金と送金が確認できた。大原の場合は、その後、6月から同院基本金管理者に就任するなど、同院への支援活動が日常化していくが、その詳細は別稿でまとめることにする。

津山町の山本桃三からは、次のような手紙が届いた。つまり、5月24

日、25日、26日の3日間津山相物商の19人が発起人となり、同院への寄付を目的に東町の東座で慈善芝居興行を開催し、不景気のため21円25銭の損失が発生したが、発起人一同が出金し10円を寄付することになったので、近日中に賛助金と一緒に持参するとの通知であった。以上が、岡山県内の地方委員の集金活動などの一端であった。

(2) 北海道内の地方委員の活動

次に北海道では、11区町村に27人の地方委員が就任していたが、実際に活動が確認できたのは10区町村の13人であった。このように、北海道内に地方委員が多かったのは、1900年8月23日から9月21日まで、先の11区町村を音楽幻燈隊が巡回して同幻燈会を開催し、その時に地方委員に就任した人達が多くおり、彼等が引き続き賛助金集金等を継続していたためであった。そして、先の13人は、函館区の磯辺員為(1900年8月)が年3回で143円70銭、小樽区の蜂谷就光(1899年11月)が年2回で63円、札幌区の越智喜三(同)が年5回で131円80銭、このうち4月の39円55銭と10月の8円90銭は次の田中兎毛(同)との合同での集金であった。また、田中個人では8月に11円50銭の送金があった。さらに、岩見沢村の内田高吉(1900年8月)が年6回で31円10銭、旭川町の辻秀(同年9月)が年11回で53円55銭、滝川町の石沢龍吉(同)が年3回で2円60銭、この他12月6円70銭は青山準次郎(1901年9月)との2人分であった。さらに、荻伏村の平野孝之助(同)が年3回で11円、浦河町の水野重国(1900年9月)が年2回で23円50銭、うち3月の9円30銭は同町の宇野慶次郎(同)との2人分であり、佐瑠太村の高橋平吉(同年11月)が年2回の13円60銭、上下方村の浅川義一(同)が年9回の16円20銭であった。

このうち、函館区の磯野員為は、3月12日に地元の『函館新報』が無料で賛助員募集の広告を掲載してくれたので、同員申込書用紙4,000枚の

至急送付を依頼して来た²⁸⁾。また、札幌区の越智喜三郎と田中兔毛からは、4月29日に賛助金39円55銭と新賛助員の入会者が届き、このうち新賛助員の入会者について次のような事例が記載されていた。この事例は、昨年同区で開催した音楽幻燈会で上映した、京都の少年が毎日掃除の手伝いをしてもらった1厘を貯金して賛助員となった例を観て感動し、この例を親族から預かる13歳児に話したところ、同児も水汲みの手伝いをして31銭5厘を貯金して寄付したというエピソードであった。つまり、昨年同幻燈会での啓蒙が今回の寄付に結びつき、同幻燈会での啓蒙の事実と寄付という行動が1セットで確認できた。さらに、8月31日には、越智と田中の手を経て理髪節約寄付金1円24銭等も送金されていた。

また、4月15日には、荻伏村の平野孝之助より賛助金3円と共に、元浦河青年会が各地で幻燈会を開催して集めた収益金7円が送付され手紙も添えられていた。その手紙によると、近年不作と不漁で賛助金の集金が困難な状況にある中、元浦河青年会では昨年岡山孤児院から送られた多数の幻燈画等を使って、冬期3ヶ月間各地に出張して慈善幻燈会を開催することを決定した。そして、平野と幻燈係の和久山五郎、太田常蔵、北村久吉が毎土曜寒天吹雪の中を馬を引いて、3里程の6カ村に出張し午後6時から幻燈会を開催し、「不完全ナガラ」平野が「カナキリゴエ」を張り上げて説明し「無学無智ノ農家ノ青年ガ無学無智ノ百姓達ノチベババヲ動カシ」て、6夜開催したとのことであった。その結果9円20銭の寄付金が集り、諸雑費2円20銭を差引いた7円を送金してきたのであった。

この手紙の内容で注目できたのは、やはり昨年同院の音楽幻燈隊が同村を訪れて同幻燈会を開催し、帰院後に、なんと同院の幻燈画の原版を元浦河青年会に送付していた事実が確認できたことである。当時同幻燈会の会場では、同院の現状等を紹介する『岡山孤児院』という冊子や『同院写真画』を販売していたが、同院の幻燈画の原版を後日送付した例はこれまで確認できなかったからである。つまり、同院の音楽幻燈隊の別働隊的なも

のを元浦河青年会に委託し、同地方で幻燈会を開催し、賛助員募集等の啓蒙活動を推進していた事実が判明したと理解できたからである。

(3) 東北地方の地方委員の活動

次の東北地方では、青森県の3市村に7人、福島県の2町に3人の地方委員が就任していた。このため、地方委員は、東北6県のうち2県5市町村に止り、青森県の場合は、やはり昨年音楽幻燈隊が北海道内の巡回後に先の3市村で開催した時に就任したのであった。このうち、青森県では弘前市の石戸谷軍三郎(1900年9月)が年3回で30円70銭を、藤崎村の阿部貞一(同)が年1回で2円、同村の長谷川英治(同)が年2回で9円10銭を集金し送金していた。一方、福島県では、福島町の長谷川裕(1900年12月)が年4回で13円60銭を送金してきた。

そして、東北地方の地方委員の場合は、3人の貧孤児を岡山孤児院に紹介し収容していた事例が確認できた²⁹⁾。まず、本年の送金は確認できなかったが福島県の喜多方町で地方委員となり、2月当時は福島町の福島民友新聞社の記者をしていた井上国太郎が若松市の貧児1人の収容を依頼し、14日に同院に収容された。この貧児は、士族の父親が死亡し、母親が再婚したため親族に預けられた。その後母親が引き取り小学校に入学したが「家内に種々の故障」があり、再度叔母が育てることになったが、老婦のため養育できなくなり、若松教会の兼子重光牧師等の紹介で入院したという事例であった。

2人目は、福島町の長谷川裕牧師の依頼で、3月11日に入院した棄児であった。この棄児は山形県米沢市で生れ、母親が死亡し、父親が育てていたが、その父親が姉妹を連れて行方をくらまし棄児となり、福島町の警察官が父親を捜索したが見つけることができなかった。その間に同町の情け深い夫婦に助けられ育てていたが、いろいろ問題を起し、この夫婦が長谷川裕牧師に依頼して来たため、地方委員の長谷川牧師の手を経て入院した

のであった。

そして、同院への送院は、この棄児を福島駅で車掌に託し、東京駅で東京出張所の宮崎利平に引き渡したが、その際に福島駅の関係者など16人より4円80銭（うち汽車賃1円10銭を除く）の寄付と長谷川牧師からの手紙が渡された。そして、この手紙には、先の棄児の「履歴」と寄付者氏名及び、新賛助員1人の入会や多忙のため2月と3月の賛助金の集金はまとめて送金し、かつ賛助員申込書の送付依頼も付け加えられていたのであった。

3人目は、3月11日に弘前市の石戸谷軍三郎から、10歳の孤児の収容依頼があったので、同日同院より「承諾書」を送付した。すると、27日午後4時半に、白布で作った勸進袋に「岡山孤児院行き」と書いたものを首から吊り下げて、その孤児が1人で来院した。また、この勸進袋には、「大方諸君の厚庇を仰ぐ」という石戸谷、笹森要蔵、奈良知足、工藤玖三の4人の地方委員名の次のような書面や手紙が入っていた。

大方諸君の厚庇を仰ぐ

孤児 八不幸にも五六年まへ慈悲ふかき父母に死わかれ兄弟親族の頼るべき縁も無之計より、やむを得ず官の救済を以て或る貧家に依託し、やうやく露命を繋ぎ居候へ共、殆ど路頭に彷徨する乞児の有様に異らず実に可憐なる児童にて行末之事二案せられ候故、断然岡山孤児院へ依頼する都合に取運び候処、幸ひ慈善家諸君の御同情を得て費用其他の準備出来候へ者、如何せん遠路の一人旅、汽車の便有之候も、道中可然御保護を蒙り不申候て八無事請院へ到着の見込不在様被存候へば、大方の諸君庶幾く八御同情を表せられんこと懇願之至に不堪候 / 頓首敬白

三月廿五日 / 青森県弘前市 / 岡山孤児院地方委員 / 岡森要蔵
/ 奈良知足 / 工藤玖三 / 石戸谷軍三郎

(『明治三四年壹月 貳月 三月 日誌 岡山孤児院』)

また、この孤児は、弘前駅から新橋駅までは、上京する今村嘉三郎が付添い、新橋駅からは駅長に依頼し、神戸駅にて1人で乗り替え岡山駅に到着したのであった。その旅費等の費用は、弘前市長よりの救助金8円50銭と寄付金で、孤児に綿入、兵児帯、ズボン、足袋を購入して服装を整え、岡山市までの旅費5円65銭を賄い、残金4円21銭は今橋が為替で送金して来た。

このような経過から地方委員が、弘前市と交渉して救助金の下付を受け、かつ、送院方法や服装の準備等を行い、10歳の孤児が単身でも無事に岡山孤児院に着くよう配慮していたことが確認できた。

(4) 関東地方の地方委員の活動

次に関東地方の地方委員の分布は、茨城県が水戸市に8人、栃木県が2市町に8人、群馬県が前橋市に2人、埼玉県は大宮町に1人、東京府は東京市に6人、神奈川県は2市町に6人であった。また、水戸市の8人、足利町の4人、前橋市の2人は、本年7月から8月の音楽幻燈会の開催時に、横須賀町の2人と宇都宮市の4人は1900年8月の同幻燈会の開催時に地方委員に就任していた。

このうち、本年は、水戸市の松井久吉(1901年7月)が年2回で11円20銭、宇都宮市の山田六三郎(1900年8月)が年4回で19円80銭、足利町の石川高吉(1901年8月)が年3回で4円30銭、東京市の福島四郎(同年5月)が年4回で13円20銭、横浜市の林蒔(1899年6月)が年8回で61円43銭、同市の畑純三(同)が年2回で21円20銭、横須賀町の清水候忠(1900年8月)が年5回で48円10銭を集金し送金していた。

そして、福島四郎の場合は、前述したように、東京出張所から大西義一等が6月5日に帰院した後を引き継いで賛助員募集を担当したのであっ

た³⁰⁾。

つまり、福島は、『婦女新聞』を発行するかたわら賛助金募集に着手し6月分として1円を送金し、7月1日には本所区の中里福之助の愛児の死去にともなう同児の衣類10数点を送付して来た。7月31日には、賛助金10円70銭（表10の8月）と本郷区の本郷小学校尋常科4年生他49人からの寄付金2円30銭も送金して来た。福島の手紙によると、7月27日に水戸上市で開催された同院の音楽幻燈会を参観し、石井院長に会い、賛助員名簿を整理して近日中に「新旧共」に送付し、『婦女新聞』にも「広告」を掲載し、三輪田真佐子よりの古着類2包も後日発送すると記し、『婦女新聞』を活用して積極的に賛助員募集等を実施していたという主旨が記載されていた。

また、先の本郷小学校の寄付金に添えられた書簡の内容を見ると、「父母の慈愛を知らぬ」孤児で、放置しておけば「悪人」になってしまう彼らを「善人」にし、「御國」の爲めになる事業であるとの認識から、小遣の中から5銭までを「申合せにて集め」て寄付したと記されていたことから、当時の小学校教師の児童への教育的な啓蒙の意図が読みとれた。

9月3日には、福島の紹介で東京水産伝習所の青年が同院で働くために来院した。しかし、7日の福島から同院への問い合わせに、本人はすでに神戸市から上京する意向と返信したため、不調に終わっていたことも確認できた。

さらに、30日には、新賛助員5人分の申込と基本金等への6人分の寄付金43円が送金され、10月30日には、岡田平太の母親葬儀の香料等からの寄付金75円の取次と、帰郷中の9月11日、12日に新潟市で開催された音楽幻燈会を観て「感動」した女子高等師範学校生が毎月10銭寄付するとの通信が届いた。11月4日には、10月中に水戸市で募集した古着類も送られてくるなど、福島は『婦女新聞』を発刊しながら、各方面から寄付金も募集し、積極的な活動を展開していたことが確認できた。

(5) 北信越地方と中部地方の地方委員の活動

次に、北信越地方の地方委員の分布は、新潟県が4市町村に16人、富山県が2市に5人、石川県は金沢市に8人、福井県は2市町に5人、長野県は3市町に9人であったが、その大半が本年8月から10月までの音楽幻燈会の開催時に就任していた。このうち、賛助員募集を実施したのは、新潟県高城村の荒木信実（1901年9月）が年2回で12円、富山市の戸田忠厚（同年10月）が年1回で4円50銭、高岡市の私立教育会（同）が年1回で3円30銭、金沢市の斎藤音作（同）が年1回で4円30銭、藤森忠一郎（同年12月）が年1回で7円20銭、敦賀町の池見栄吉（同年10月）が年1回で1円20銭、人見宣安（同）が年1回で60銭、長野市の村松忠雄（同年8月）が年1回で13円90銭、上田町の河合操（同）年2回で7円、飯田町の小沢慎（1900年5月）が年2回で12円を集金し送金して来た。

そして、中部地方の地方委員は、静岡県が2市町に5人、愛知県が名古屋市に2人、岐阜県が2市町に3人で、山梨県にはいなかったが、いずれも昨年7月と8月初旬の音楽幻燈会の開催時に就任していた³¹⁾。このうち本年は、岐阜市の伊木久次郎（同）が年4回で17円70銭、静岡市の森田弘道（1900年7月）が年6回で45円、藤波甚七（同）が年4回で27円40銭、沼津町の和田伝太郎（同）が年1回で2円60銭、名古屋市の赤司繁太郎（同）が年3回で26円50銭を集金し、送金して来たことが確認できた。

また、本年の送金はなかったが、2月11日に名古屋市の地方委員の富田耕治が突然来院し、朝集会で「面白き北海道談」を述べ、午後7時から富田の歓迎会を開催し、青年院児たちが音楽の演奏と剣舞を披露したことが確認できた³¹⁾。その後富田は夜行列車で帰途したが、来院の目的は北海道の江別付近で陶器製造場を設立するため、院児を職工として募集するためであった³¹⁾。

(6) 近畿地方の地方委員の活動

近畿地方の地方委員の分布は、滋賀県が4市町に8人、京都府が京都市に3人、大阪府が3市町に5人、兵庫県が7市町村に20人、和歌山県が5市町村8人、奈良県が奈良市に2人であった。そして、滋賀県では、大津市の藪田信吉（1900年6月）年が12回で66円、彦根町の森山寛之助（同）が年4回で24円50銭、若林湛次（同年12月）が年2回で13円90銭、長浜町の伊藤鶴子（1901年1月）が年7回で47円20銭、八幡町の島田信太郎（1900年6月）元地方委員が年1回で5円60銭を集金し送金していた。

このうち、森山寅之助よりは、半身不随の母親を持つ貧児の收容依頼があったため、1月12日收容し、29日にその貧児の写真を森山に送付した³²⁾。また、9月7日には法事費用8円の寄付を取り次いでいた。藪田信吉は、1月26日に15歳の障害児の入院を依頼して来たが、断っていた³²⁾。また、本年の送金はなかった長浜町の地方委員吉田正信よりは、長浜警察署で保護した「乞食同様」の孤児の收容依頼があり、6月3日入院した³²⁾。

そして、京都府では、京都市の辻慶三郎（1899年5月以前）が年10回で226円80銭、池内勝世（同）が年2回で18円80銭、安藤正二郎（同）が年9回で81円10銭、大阪府では大阪市の池田為治（1900年1月）が年11回で398円45銭、松枝萬助（1901年2月から）が年10回で20円80銭、青木由太郎（1900年6月）が年9回で44円、二宮半次郎（同8月）が年9回で37円30銭を集めて送金してきたが、池田の398円45銭は最も高額の集金で、辻の226円80銭が2番目となり、その他の地方委員の集金と合わせると京都市では計326円70銭、大阪府では計500円55銭と京都市と、大阪府から多額の賛助金が送金されていたことが確認できた。

また、辻は、1月6日に岡山孤児院を訪問し、翌7日の朝集会で「幼より神聖なる教育を受けて反って汝等の不幸ハ我等より幸なり」との主旨を話していた³³⁾。4月5日には、9円98銭の寄付金を取次ぎ、7月11日に

は京都府師範学校生が集めたライオン慈善券と賛助金 4 円 20 銭および八木小春の賛助員入会などの報告が確認できた³³⁾。また、同月 2 日には安藤正二郎の取次により、日本基督教会が設立した中立幼稚園と安息日曜学校の生徒が貯金した 1 円が送金された³³⁾。

さらに、地方委員の活動ではないが、関連の活動として、4 月 25 日午後 1 時より上京区の大観楼において、大挙伝道夫人伝道隊主催の岡山孤児院寄付慈善音楽会を開催し、26 円 28 銭の寄付があったことを付け加えておく³³⁾。

そして、兵庫県では、神戸市の吉田きよの (1898 年 11 月) が年 7 回で 34 円 10 銭、大森光 (1899 年 6 月以前) が年 3 回で 5 円 60 銭、田村新吉 (同) が年 7 回で 202 円 30 銭、松田治郎吉 (同) が年 7 回で 30 円 30 銭、三瀬千鶴江 (同) が年 7 回で 57 円 40 銭、鎌原政子 (1900 年 1 月) が年 3 回で 16 円 60 銭、浦木弘 (1900 年 12 月) が年 7 回で 52 円 50 銭、矢島 (1901 年 2 月以前) が年 6 回で 9 円 90 銭を集金し送金して来た。さらに、姫路市の品川悠三 (1899 年 5 月以前) が年 4 回で 30 円 30 銭、早川 (1901 年 9 月以前) が年 1 回で 9 円 20 銭、三田町の斎藤素一 (1899 年 6 月以前) が年 3 回で 14 円 50 銭、明石町の中西幸太郎 (同年 5 月以前) が年 4 回で 46 円 90 銭、西宮町の岡田藤吉 (1901 年 12 月) が年 1 回で 1 円 20 銭を集金して送金して来た。

このうち、大森光よりは、2 月 22 日に芸者の賛助員の「可否」についての問い合わせがあったので、同院は「ドン／＼募集」を依頼したため、2 月の「新賛助員」(『岡山孤児院新報』第 53 号附録) に芸者名とみられる 6 人が新賛助員に入会していた³⁴⁾。また、年間 202 円 30 銭もの賛助金を送金して来た田村新吉は、7 月 3 日に賛助員の中村ますが節句祝いを中止し、その費用 1 円 50 銭を寄付することになり、この取次を実施し、9 月 29 日には孤児の入院を依頼していた³⁴⁾。

斎藤素一も「乞食界に落ちんとする」11 歳児の収容を依頼し、1 月 5 日

入院していた³⁴⁾。また、中西幸太郎は、3月4日同院を訪問して一泊し、4月29日には57銭を寄付し、8月28日には須磨駅の慈善箱開箱による50銭の寄付金と書面を送付して来たことから、近隣の駅に設置した慈善箱の開箱と送金も地方委員が担当する例が確認できた³⁴⁾。

奈良県では、奈良市の片桐鱗太郎（1899年6月以前）が年1回で7円20銭、8月からは片桐の転居に伴い後任の秋田猪太郎が年3回で3円10銭を集め、和歌山県では和歌山市の茨木昭一（1899年5月以前）が年7回で66円90銭、田辺町の伊藤貫一（同年6月）が年10回で29円50銭、新宮町の平石元吉（1900年7月）が年4回で58円、御坊町の山本董一（1901年1月）が年5回で6円70銭、日置村の川口重蔵（同年4月）が年5回で24円60銭、松場（同年10月以前）が年1回で3円60銭を集金して送金して来た。

このうち、1月21日には、茨木昭一の賛助金の経費が「予想外に多用」としていると判断し、もう1人の地方委員の小笠原誓至夫に調査を依頼していたことから、地方委員の活動を相互にチェックしていたことが理解できた³⁵⁾。また、4月4日には、川口重蔵より日置村の有志や学生に岡山孤児院の孤児救済とその「教養」を説明したところ、「大に感激」して寄付してくれることになり、4月1日より順次募集するので集りしだい送金する事と、同村の大工等の協力で同院のための慈善箱を6ヶ所に設置し、1ヶ月か2ヶ月に1回開箱する計画であるとの書簡も届いていた。

そして、30日に川口より「第一回地方通信」が届き、合計7円10銭が送金されてきた。その内訳は、毎月10銭の賛助員30人より計3円、毎月30銭の同員2人より計60銭、1月から毎月30銭の新賛助員の4月までの同金計1円20銭、年間1円の賛助員2人より計2円、および6人の寄付金計45銭の合計7円25銭で、そこから為替料6銭と郵税9銭を差引いた7円10銭が送金されて来た。さらに、慈善箱の錠2個と『岡山孤児院新報』の「借読」として5銭が寄付されたことも付け加えられていた。そし

て、5月29日には、5月よりの毎月10銭の新賛助員5人、年間1円の同員1人、年間1円の現賛助員2人および臨時寄付金(錠代3個含む)3人より1円30銭、慈善箱の20銭を送金するとの報告があった。7月6日にも、川口の取次で、三舞村長小山源七郎と日置村の日置銀行員の2人が両村内の20人より集めた計4円40銭の寄付金が送付され、臨時寄付金の領収書100枚程の送付依頼もあった。

(7) 中国地方の地方委員の活動

次に岡山県を除く中国地方の地方委員の分布は、少し欠落もあるようだが鳥取県が2市町に2人、島根県も2市町に2人、広島県が11市町村に26人、山口県が10市町村に19人と、広島県が岡山県に次いで2番目に多くの市町村に分布し、山口県が3番目であった。

そして、鳥取県では、米子町の岡島太治郎(1899年5月以前)が年5回で22円70銭、地方委員ではないが鳥取市の井上が年3回で21円50銭、島根県では松江市の長野武二(1898年6月)が年3回で3円50銭を集金し送金して来た。また、広島県では14人から送金等が確認でき、広島市の堀峰橘(1900年8月)は昨年8月に釘宮辰三牧師の後任となり、本年は年7回で39円30銭、これに、村田里(1899年11月)が年2回で6円90銭、日下部愛之(1900年3月)が年8回で51円50銭、吉見(1901年10月以前)が年2回で8円60銭であった。さらに、尾道市の葛岡竜吉(1898年8月)が年3回で26円、当間(1901年6月以前)が年4回で28円60銭、三原町の西川玄治(1899年9月)が年3回で2円70銭、藤井竹次郎(1900年11月)が年7回で7円30銭、木村(1901年11月以前)が年1回で90銭、府中町の鶴岡鉦二(1900年6月)が年3回で30円20銭、福山町の佐藤(1901年7月以前)が年1回で21円60銭、松永町の村上(1900年10月以前)が年1回で14円20銭、鞆町の貫生税(1899年9月)が年6回で5円20銭、新市村の千葉研三(1900年6月)が年1回

で2円50銭を集めて送金して来た。

そして、山口県では7人から送金があり、山口町の日野原善輔（1900年10月以前）が年4回で19円60銭を送金して来たが、その後、日野原が渡米したため、その後任となった河原実雄（1901年7月）が年2回で8円30銭、岩国町の小田重嘉右衛門（1899年9月）が年3回で18円40銭、三田尻村の木村源兵衛（1900年3月）が年3回で13円60銭、長府村の末永頼太郎（同）が年1回で5円、下関（赤間関）市の富海松兵衛（同年2月）が年8回で84円50銭、富海村の松下精（同年3月）が年2回で4円50銭を集金して送金して来た。

このうち、富海松兵衛は、1月3日に「兼ねて希望の通」り妻と娘を同伴し岡山孤児院を訪れ、翌4日の朝集会で「感話」を述べていた³⁶⁾。2月4日は、富海より美弥郡伊佐村の12歳の孤児の入院依頼があり、13日入院した。4月10日には、富海外1人より7円の寄付があり、かつ下関市内での物品募集隊からの取次の寄付金11円22銭を送金して来た。5月13日には、富海から5円、6月17日にも2円の寄付があった。10月4日には、富海の母親永眠の通知が届き、甲電を打ち、11月26日に2円、12月24日に5円の寄付があった。このため富海は、募集した賛助金の送金を年間8回実施すると同時に、本人自身の寄付金も送金する等の積極的な活動を実施していたことが確認できた。

その他、4月17日には、末永頼太郎が家族3人と釘光を同伴して来院して2円を寄付し、釘光は1月に賛助金7円90銭を集金し取次いでいた。5月9日には、日野原善輔の紹介状を持って竹原芳蔵が来院し、「見込アル男児」を貰うて商店を譲渡したいとの申込があった。10月2日には、小田重嘉右衛門より、賛助員の栗原が養子として院児1人を希望しているとの紹介があった。

(8) 四国地方の地方委員の活動

一方、四国地方の地方委員の分布は、少し欠落もあるようだが香川県が6市町村に12人、愛媛県が10市町村に25人、徳島県が2市町に4人、高知県が4市町村に8人であった。このため四国4県の主な市町に地方委員が存在し、愛媛県は岡山県と広島県について3番目に人数が多かった。

このうち、香川県では、高松市の増井嘉吉(1900年8月)が年4回で75円60銭、渡辺(1901年7月以前)が年1回で2円、丸亀町の北川孟次(1900年8月)が年11回で59円70銭、讃岐鉄道の秋守平八郎(同年4月)が年1回で3円10銭、坂出町の岩瀬庄太郎(1898年11月)が年1回で41円、善通寺村の有沢繁治(1900年4月)が年1回で30銭と、北川は毎月のように集金して送金していた。

愛媛県では、新居浜村の柿原正一(1901年1月)が年12回で28円80銭、松山市の祝田米太郎(同年6月)が年4回で14円95銭、武智広重(1899年9月)が年1回で17円50銭、田中義弘(1901年6月)が年1回で1円、三津浜町の斉所功(同)が年1回で3円30銭、今治町の矢野元吉(1898年8月)が年1回で39円20銭、郡中町の日野末吉(1900年2月)が年4回で19円50銭、八幡浜町の二宮茂俊(1899年11月)が年8回で15円60銭、吉田町の朝家万太郎(1900年9月)が年1回で1円70銭、菊間町の西原憲(1898年10月)が年3回で8円40銭、宇和島町の木村(1901年10月以前)が年2回で2円70銭、小西巽(1899年9月)が年2回で12円10銭と、柿原正一は毎月集金して計28円80銭を送金していた。この他に、地方委員でなかったが川之江町の和泉(1900年12月から)が年5回で5円80銭、これを引き継いだとみられる毛利(1901年9月から)が年3回で2円10銭が加わっていた。

高知県では、高知市の村田宗兵衛(1898年11月)が年6回で72円80銭、砂川竹蔵(1899年7月)が年2回で7円80銭、木山村の畠山克己(1900年9月)が年1回で9円90銭、安芸町の野村富恵(1899年6月以

前）が年2回で5円40銭、埜邨二三（1900年4月）が年1回で6円80銭であったため、村田宗兵衛が最も積極的な集金（送金）を実施していたことが理解できた。

このうち、3月17日には、松山市の武智広重が来院し19日まで宿泊していた³⁷⁾。そして、4月26日には、武智より松山市での寄付金募集についての委任状の再送付の書簡が届いた。この書簡によると、過日同市の巡查より、2県以上での寄付金募集については、内務大臣の認可書が必要という指示があり、先日の3月17日に武智が訪問した時に認可書の写をもらい県知事に提出したが、規則の改正で慈善事業のための寄付金募集はその必要がなくなった。ただし、院長よりの委任状が必要になったので、下記の書式の委任状の送付を依頼して来たのであった。

五厘印紙 / 委任状

伊予松山市大字末広町壱丁目五拾九番戸

岡山孤児院地方委員 武智広重

右之者を以て代人と定め左の権限之事を代理担当為致候事

一愛媛県下に於て孤児或は之に等しき貧兒之救済、臨時寄付金の募集、
賛助員並ニ賛助金穀の募集、孤児院卒業生紹介之件 / 右委任状依テ
如件

明治参拾四年 月 日

岡山県岡山市門田屋敷百九拾七番邸 岡山孤児院長 石井十次印

（『明治三四年四月 日誌』）

つまり、この事例から地方委員が2県以上で賛助員募集等の寄付金募集を実施する場合は、岡山孤児院長の委任状を地元の警察署長に提出することが、正式な寄付金募集の方法であったことが理解できた。このため、2県以上で賛助員募集活動を地方委員が実施する場合に、地元の警察署への

手続が必要になることが確認できた。

そして、最も注目すべきは、先の委任状がなぜ必要であったかということ、地方委員の武智と玉井正広が中心となり松山市等で幻燈会を開催し独自の寄付金募集を実施するためであった。この事実が確認できたのは5月31日に武智から岡山孤児院に届いた「幻燈運報告書」という書簡と『同院新報』第58号付録の記事からであった。つまり、武智等は、4月28日に温泉郡三内村大字河之内で、同院の事業に「同情」する近藤四郎と近藤まきが発起者となり幻燈会を開催し、44人と路傍喜捨金計5円54銭5厘を募集していた。また、5月5日には、周桑郡田野村大字長野で開催し1円47銭を、田窪村の路傍演説で20銭8厘を募集していた。さらに、10日には、温泉郡垣生尋常小学校長八束寿弘の紹介による垣生村青年倶楽部員の発起により長栄座において午後7時30分より幻燈会を開催し、参観者が700余人と「盛会」になり、小屋料3円は同倶楽部員より、2人の宿泊料と雑費は同村音楽隊よりの寄付で賄った。そして、翌11日から寄付金募集運動に取り組む予定であったが、同村の規程により「一切之寄付」を断るといことで、50銭の寄付金しか集らなかった。13日は、温泉郡三津浜町で路傍演説を開催して岡山孤児院を紹介したところ、同町の早川正周の非常なる尽力により早川と巻幡一郎の発起で、16日、17日に永楽座で幻燈会を開催することになった。そこで、16日午後町内有志者へ優待券と案内状を送付し、町内宣伝のため人力車3台で太鼓を打ち、各街で演説をして永楽座に帰り開会した。開会の辞は発起者の早川に代って税田米次郎が述べ、次に武智が「岡山孤児院設立者の主意」と将来の希望を説明して幻燈会を開催した。また、余興として2、3人の剣舞があり、参観者は700余人であった。そして、上記の活動内容で注目できたのが、今回の幻燈会が、岡山孤児院の幻燈画を上映し、武智がその説明を実施して寄付金募集を実施していたことが裏付けられたことである。さらに、この事実から、武智が3月17日から19日まで同院を訪問した時に、幻燈会を開催して寄

付募集を実施することを相談し、その際同院の幻燈画を借用し、幻燈機は松山市で調達したことも理解できたことである。また、その意味では、前述した元浦河青年会が同院の幻燈画を上映して賛助員募集等の啓蒙活動を実施したことと、同様の活動が松山市でも実施していたと判断できたことである。ちなみに、当時の音楽幻燈隊は、長崎市や佐賀市等で同幻燈会を開催していたため、武智等の活動は同院の音楽幻燈隊の別働隊的な活動と位置付けることができた。

そして、翌 17 日も午後 3 時より人力車 3 台で町内を宣伝し、午後 8 時より武智が開会の辞を述べ、幻燈に移り、余興として子どもの剣舞もあり、「大に拍手」がある中開会し、参観者は 800 余人となった。2 日間とも幻燈中は「静粛」で「一ノ悪口暴許」がなく、永楽座では初めてのことであった。18 日に寄付募集隊が町内の各戸を訪問して寄付金を募集し、その結果 164 人から 16 円 85 銭と路傍喜捨金 8 円 74 銭 7 厘の計 25 円 59 銭 7 厘が集り、小屋借料他諸雑費が 19 円 78 銭 5 厘であったため、5 円 81 銭 2 厘の収益となった。この他衣類等の寄付もあり、こちらは三津汽船問屋に送付を依頼した。

26 日は、温泉郡川上村大字南方の米田屋を借りて午後 7 時 30 分から開会し、発起者は同地の郵便局長の城寛平、城信子、城久子であった。開会の辞は城寛平が述べ、その後幻燈を上映し、「同地に於て近頃珍らしき集り」のため参観者は 500 余人となり、寄付金は 52 人より 6 円 55 銭集り、席料、滞在費、運搬費、雑費が 5 円 14 銭かかったため、収益金は 1 円 41 銭となった。

そして、この間の 5 月 19 日には、松山市の松山高等女学校の英語教師のシドニー・ギューリックより、武智の「信任二就テノ書状」が岡山孤児院に届いていたことから、同院としては今回の武智の幻燈会の開催による寄付金募集活動について、武智の信用度をギューリックに問い合わせ、「信任」の保証を得ていたことが理解できた。

実は、岡山孤児院が武智の寄付金募集活動に関する信用度をギューリックに問い合わせた背景には、武智の活動に関する質問が同院に届いていたからとみる。また、武智自身もそのことを知っていたようで、先の5月31日の書簡の中で、武智の幻燈会の開催時に寄付した臨時寄付金の内容が『岡山孤児院新報』に掲載されているかどうかの問い合わせが武智自身にもあり、岡山孤児院にも「迷惑」をかけており、5月1日の武智からの報告を『同新報』に掲載することを「伏テ」懇願していたからである。

さらに加えて、賛助金の件は、西岡磯吉が集金中で明日後日には送金できるとの主旨と、伊予鉄道の各駅に設置する慈善箱を20個請求したが1個しか届いていないため、至急送付するようにとも依頼して来た。また、書簡の末尾には、5月26日の川上村での幻燈会の時に、城信子が作詞し、7人の女生徒が歌った「孤児」題する唱歌を付記し、活動状況を詳しく説明していた。

そして、武智は、その後6月11日に温泉郡北條町で河合石太郎、高宮平太郎、木ノ下直太郎、得居市郎、堀峯幸介、門屋履徳、内田又市が発起者となる幻燈会を開催し、78人より寄付金6円59銭と喜捨金9円30銭の計15円89銭を集め、20日には同郡道後湯之町で、越智政近、二神千代、谷信貫が発起者となり開催し、30人より4円25銭を募集した。また、6月24日、25日には、松山市の新栄座で岡本正保、谷信貫、中村正静、元木幾之助が発起者となり開催し、58人より10円29銭と喜捨金27円30銭の計45円59銭を集め、松山招魂祭で72銭6厘の寄付があったため、4月28日から6月25日まで7回の幻燈会で合計105円82銭6厘を募集し、その他に衣類等の寄付もあったのであった。

さらに、武智は、5月5日に幻燈会を開催した同桑郡田野村では、7歳の孤児の岡山孤児院への収容を依頼し、6月26日入院させていた。この孤児は、父親が3年前に死去し、母親もその後3年間「不治の病」の中で2人の子どもを養育していたが4月22日に死亡し、弟は養子となったが、

本児は親族がないため乞食のような生活をしていたところを救助され同院へ収容したのであった。そして、この送院にあたっては、6月24日に新栄座で開催した幻燈会の中で同院へ送る付添者を募集したところ、岡山市の高等学校へ入学する2人の学生が同行を申し出てくれ、同院へ送院したのであった。また、その際、田野村役場職員より1円、出発時の寄付75銭、三津港より字品港までの汽船那智川丸の無賃乗船、船中での船長他より80銭と、汽車での1円と菓子の寄付もあった。

このように、武智等は、松山市とその周辺の7町村で、岡山孤児院から幻燈画を借用し、同院の音楽幻燈隊の別働队的な活動として幻燈会を開催し105円82銭6厘の寄付金募集等を実施していたことが確認できた。また、この活動は、同院が3年前の3月8日から10日までの3日間松山市で音楽幻燈会を開催し、その後同市に同院の賛助員や地方委員が就任したため、その延長線上に位置付く活動として注目できた。

ただし、岡山孤児院は、6月24日、先の武智等の開催した幻燈会の活動について「取調ノ為」に河本茂四郎を松山市に派遣したのであった。そして、27日には河本より同院への電報で「領収書等」の送付依頼があり、これを送付し、29日には、「地方委員善後処分好都合」の報告もあった。河本の出張の名目は、「松山地方委員を増員し将来同地方に於て賛助員募集計画」を立てるとの用務であったが、実際には武智等の幻燈会での寄付金募集の収支決算の内容を調査するものであったとみる。

そして、河本は、武智および松山市における「本院同情者の方々」と協議し、7月3日に帰院したが、その結果は武智と玉井が地方委員を辞任し、新たな地方委員として祝田米次郎、畑とも子、田中義弘、中西徳、齊所功が就任し、岡山孤児院地方事務所を松山市南堀端町の祝田方に設けることになった。また、武智等が7ヶ所で開催した幻燈会での発起者と寄付金額および、その寄付金の内訳としての個々の寄付者氏名と金額が『同院新報』第58号付録に掲載し、公開したのであった。

以上が武智等の幻燈会の活動内容と地方委員の変更であるが、その他に八幡浜町の二宮茂俊からは、5月29日に二宮が集金した賛助金を岡山孤児院に送ると聞いて、6歳になる我子が下校後マッチ製造の手伝いをして蓄えた貯金より10銭を寄付するとの報告が届いた。また、高知市の砂川武蔵と小栗正気からは、2月8日付の手紙で貧児2人の収容依頼があり、3月8日に入院した。その手紙によると、父親は死去し母親が高知病院に入院中で、親族も困窮して引き受けられないために収容を依頼して来た。さらに、手紙の末尾には、賛助金受領帳の数部送付と新賛助員の募集方法として高知県下の各郡役所や各高等小学校に冊子『岡山孤児院』を送って依頼するので10数冊の送付も求めて来た。そして、この2人の貧児の送院方法は、2人の着物の襟に、「岡山孤児院行」と貧児名および「内国通運会社高知取引所」と書かれた白布を縫い付けて、高知市より船で神戸市に行き、山陽鉄道会社の車掌の手で岡山駅に着き、同駅近くの内国通運会社の職員が岡山孤児院に届けるといふ、貨物輸送方式の送院であった。さらに、3月15日には、先の内国通院会社高知取引店主より、送院の途中で55人から寄付金11円10銭があったということで、「小児携帯」50銭を差引いた残金10円60銭が送金されて来た。

また、7月6日には、高知市の田村宗兵衛から、賛助員の織田信福夫人のたけ、深尾のゑ、片岡みゆ、楠ともき、片山うたの高知市婦人衛生会幹事が発起人となり、同会の5周年を記念して幻燈演説会を開催し、その際の収入のうち、実費を差引いた30円58銭2厘の寄付金が送金されて来た。

(9) 九州地方の地方委員の活動

九州地方の地方委員は、福岡県が8市町村31人、佐賀県が2市町7人、長崎県が2市村6人、大分県が1町1人、宮崎県が4市町4人であった。また、このうちの多くの地方委員は、1900年2月と1901年5月から6月上旬に音楽幻燈隊が各県の主要市町村を巡回して同幻燈会を開催した直後

に就任していた。そして、本年活動が確認できたのは、福岡県の若松町の松隈正樹（1900年1月）が年2回で17円60銭、門司市の鶴原五郎（同年2月）が年4回で72円60銭で、このうち2回は並松親治（同年10月）等と合同であった。さらに、門司市の岸耕田郎（同年2月）が年4回で23円90銭、福岡市の片山静之助（1899年11月）が年10回で36円30銭、久留米市の佐々木高（1900年2月）が年3回で16円30銭、柳河町の笹尾昇蔵（同）が年5回で27円95銭、小倉市の柴田董之（1900年1月）が年6回で37円10銭であった。

佐賀県では、佐賀市の西牟田新八（1901年5月）が年2回で17円、長崎県では長崎市の佐々木辰三（同）が年9回で154円50銭（10月は複数の地方委員の集金含む）で、佐々木の場合は5月に地方委員に就任する以前からの集金も含まれていた。また、佐世保村の松尾良吉（同）が年2回で3円80銭、川浪荘一（同）が年2回で6円50銭、大分県では中津町の野依曆二（1900年12月）が年8回で38円40銭、宮崎県では飫肥村の武田猪平（1898年11月）が年1回で9円で、この武田の後任の日高孝平（1900年12月）が年2回で6円90銭、高鍋町の末藤新市（1901年7月以前で同年3月までは地方委員に就任していない）が年4回で2円40銭（1月、3月は地方委員就任前）、延岡町の加藤馨之助（1898年6月）が年4回で12円40銭であった。

このうち、門司市の鶴原五郎と松並親治からは、2月24日に同市の地方委員4人が「門司委員臨時小集開会」を開き、今後の同地での賛助員募集について協議した結果報告等の書簡が届いた³⁶⁾。この書簡によると、昨年岡山孤児院が九州運動として2月16日、17日に開催した音楽幻燈会より1周年が過ぎ、「往時を追懐し」て、「我々地方の賛助者が如何に貴院に報い」、「何程主に貢献せしかを黙想すれば」嘆かわしい状況で、当時のように「貴院に寄せたる同情の熱はいつしか下降して殆んど結氷点に達せんとする今日」に、「人情の輕薄」を思い、「我等は主に祈りて此怠眠を攪醒

し一杯の水一ツのレフタなりとも捧げ奉るの覺悟」がなければならぬと考へた。そこで、この一周年を記念して「同志委員諸君」が招集會を開き、賛助員の増員とその方法を相談するため作中宅で會合を開催し、参加者が岸耕三郎、江藤義資、南千蔵、鶴原五郎の4人しか集まらなかつたが、別紙の「旨趣」を打ち合わせた。また、3月2日にさらに會合を持って「善後の相談」をまとめることにし、別紙の「旨趣」の中の慈善箱（寄付金函）の増設は早めに実施していただきたいので至急10個だけ送付し、さらに、賛助員申込書を各委員に渡す必要があり、かつ、賛助金領収書を「普通」の分5冊、「一圓」の分10冊を、1冊50枚程に綴って送付を依頼して來た。さらに、昨年未の賛助金の未集金分は、次回の3月2日の會合までに取りまとめて送金し、熱心に尽力した中山喜多造は「筑前の炭山」に転居したため地方委員としては消滅したとも報告して來た。

そして、別紙の「旨趣」は次のような内容であつた。

- 一 賛助員追々減數に付孤兒院幻燈音樂隊が門司に運動せし一周年を紀念し此際我々委員に於て新賛助員を募集することを約し各委員に於ては必ず十名以上を募りて孤兒院に貢獻する事
- 一 新に委員若干名を撰定する事
- 一 毎月廿七日を以て委員の例會を催し相談を爲す會席は委員順番にて自宅に招集する事 但日曜に當るときは順延すること
- 一 從來の賛助員は岸鶴原並松三氏にて取扱ひ今後新募集の分は各委員にて分担取扱ふ事
- 一 山陽連絡汽船連絡待合所並びに門司馬關小倉若松等の要處に在る知名の宿屋料理屋等に交渉し孤兒院の慈善函を設置することを盡力運動する事 但山陽には岸氏 商船會社には南氏交渉の任に當る事
- 一 鶴原より本部へ慈善箱十個を要求する事
- 一 將來門司地方の風教を矯正し大に慈善心を喚起し依て孤兒院の如き事

業を翼賛せしめん事を期し門司婦人會を組織せん事を企圖し談旨趣書
は次會迄に考案提出する事
一次會三月二日午後三時作中氏方に開催すること
（『岡山孤児院新報』第53号）

つまり、各地方委員が新賛助員を10人以上募集し、毎月27日に各委員
宅で順番に例会を開き、今後の募集は各委員が分担して取り組み、山陽連
絡汽船待合所、門司市、馬関市、小倉市、若松町等の有名な宿屋、料理屋
等と交渉し慈善箱の設置運動に尽力し、将来門司地方の「風教を矯正し大
に慈善心を喚起」して、岡山孤児院の事業を翼賛するために門司婦人會を
組織し、その「旨趣書」を次回までに「考案」して提出するという内容で
あった。

このように、門司市では、地方委員が中心となり、停滞した状況を打開
し、初心に返って再度賛助員募集を継続的に拡大する方法を試考し、取り
組もうとしていたことが確認できた。なお、鶴原は、10月30日長男と岡
山孤児院を訪問していた。

その他、飢肥村の武田猪平は、2月2日に岡山共励会20年記念会に出
席のため来岡し、4日に岡山孤児院を訪問して朝集会で「聖句教授」を行っ
ていた。また、6月1日には、長崎市の地方委員から臨時寄付金21円48
銭のうち送料を除いた9円80銭と寄付物品が送付されたが、これは、5
月6日、7日の同市での同院の音楽幻燈会の開催直後に寄付金募集を実施
したことと関連する寄付と理解できた。さらに、9月8日には、佐々木辰
三が来院し、午後11時過ぎに帰途していた。

以上が、1901年の地方委員の活動実態だが、同年は37道府県の144市
区町村等に341人の地方委員が存在し、このうち、実際に活動したのは
34道府県の113市区町村等の156人であったことが確認できた。

7) 岡山孤児院への直接入会者と送金者

そして最後に、岡山孤児院への直接入会者（新賛助員）と現賛助員の直接送金者の内容であるが、この内容は、すでに表 5 で前者（第 1 種）の新賛助員（毎月出金者、1 年分出金者）と、後者の現賛助員の直接送金者（1 年分出金者）の月別の人数をまとめ、その推移を少し述べたところである。その推移は、第 1 種の新賛助員数が毎月 12 人から 100 人となり、1 月から 5 月と 9 月が 60 人台から 100 人台と多かった。また、その内訳の毎月出金者は、11 人から 73 人で、5 月が 90 人台、9 月が 70 人台と最も多く、一方、1 年分出金者は 1 人から 48 人で、2 月から 5 月が 30 人台から 40 人台と多かった。さらに、後者の現賛助員の直接送金者（1 年分出金者）は、毎月 4 人から 47 人で、2 月から 7 月と 12 月が 20 人台から 40 人台であった。

そして、岡山孤児院への直接入会者（新賛助員）の場合、特に注目したいのは、どのような道府県の市区町村からの入会者であったかということで、その分布状況を、1 月の 50 人と 2 月の 69 人を例にみていくと、次のようになる³⁹⁾。

1 月の毎月出金者（新賛助員）は、岡山県の児島郡西与興除村 1 人、都窪郡妹尾町 1 人、小田郡美山村 1 人、苫田郡高野村 2 人、勝田郡河辺村 1 人、真庭郡河内村 6 人と、岡山県内の 6 町村から計 12 人が入会して来た。さらに、兵庫県米田村 1 人、埼玉県浦和町 1 人、福島県中村町 2 人、青森県鱒ヶ沢町 1 人、島根県津和野町 1 人、広島県高屋村 1 人、山口県勝山村 1 人、同県熊野村 1 人、同県長府村 1 人、和歌山県内海村 1 人、徳島県新居村 1 人、愛媛県川之江町 1 人、佐賀県佐賀市 1 人、宮崎県高鍋町 2 人、北海道浦臼村 1 人、同角田村 1 人、同長沼村 3 人、同沙留村 1 人と 13 道県の 18 市町村から計 22 人の入会が確認できた。

また、1 年分出金者（新賛助員）は、静岡県島田町 1 人、埼玉県大森町 1 人、同県大岡村 1 人、千葉県佐原町 2 人、同県銚子町 1 人、長野県中塩

田村 1人、同県宮川村 1人、宮城県仙台市 1人、岩手県盛岡市 2人、同県甲子村 1人、青森県金木村 1人、山形県楯岡町 1人、同県酒田町 1人、北海道目名村 1人と 9 道県の 14 市町村の計 16 人であった。このため、1月の新賛助員の地域分布は、全体で 20 道県の 38 市町村の 50 人であったことが確認できた。

次に、2月には、毎月出金者（同）が、岡山県では上道郡高島村 1人、御津郡新山村 2人、浅口郡玉島町 1人、同郡西大島村 1人、後月郡木之古村 1人、英田郡 7人と 6 郡町村の計 13 人となり、これに、奈良県御防町 2人、愛知県熱田町 1人、新潟県新潟市 2人、広島県川南村 1人、同県市村 1人、島根県大森村 1人、徳島県富岡村 1人、同県長生村 1人、北海道富良野村 1人、同室蘭町 7人、台湾台北 4人、米国 2人と、7 道県の 10 町村の 18 人と台湾 4人、米国 2人の計 24 人が加わった。

また、1年分出金者（同）は、岡山県が児島郡田井村 1人、真庭郡瀬田河村 1人、同郡下方村 1人、久米郡倭文西村 1人と 4 村の計 4 人で、これに、大阪府天下茶屋 1人、兵庫県魚崎村 1人、同県古市村 1人、三重県庄野村 1人、同県府中村 1人、愛知県八幡村 1人、神奈川県神奈川町 1人、茨城県結城町 1人、同県関本町 2人、同県大貫村 1人、同県華川村 1人、同県沼前村 1人、愛知県兼山村 1人、群馬県元惣社村 1人、同県沼田町 1人、福島県須賀川町 1人、同県川俣町 1人、同県郡山町 1人、青森県八戸町 1人、秋田県鷹巣村 1人、石川県金沢市 1人、新潟県村松町 2人、同県三条町 1人、広島県西条町 1人、香川県桑山村 1人、北海道江差町 1人の、14 道府県 23 市町村等の 28 人が加わった。このため、2月の新賛助員は、全体で 19 道府県の 39 郡市町村等と台湾、米国に分布し、合計 69 人が入会していたことが確認できた。

このように、1月と2月の新賛助員は、全国各地の市町村等に分布し、各地から岡山孤児院へ直接入会を申し込んでいたことが理解できた。また、このような新賛助員は、前述してきた、大西義一と宮崎利平等の東京市等

での賛助員募集、佐藤惣吾と宮崎兵吉郎等の岡山市と岡山県内の町村での賛助員募集、入江大九郎の関西方面を含む近隣県での賛助員募集、および音楽幻燈隊の中での賛助員募集や地方委員による賛助員募集の活動では対応しきれない、全国各地の未開の市町村からの入会申し込みも多く届いていたことが確認できた。

そして、先の全国各地の未開の市町村などからの新賛助員の入会を促進した、1901年の要因の1つとして注目できたのが、大日本女子学会による募集活動であった。実は、大日本女子学会と岡山孤児院の出会いについては、前述したように、東京出張所の宮崎が、2月25日に、麹町区土手3番町の大日本女子学会を訪問し、山沢俊夫に面会して同学会の雑誌『をんな』の付録として「岡山孤児院賛助員申込書」を掲載してくれたことへのお礼等から、両者の関係が始まり賛助員募集の契機になったことが確認できた。さらに、この雑誌は、1901年1月に女性向けの通信教育を始めた同学会が発行した雑誌で、この雑誌に「同院賛助員申込書」が掲載されたことで、全国各地の向学心を持つ若い女性などに対し、同院の賛助員募集を宣伝することができ、新しい階層の全国規模の募集対象を獲得する契機になったと理解できた。

具体的には、この雑誌を通して2月の新賛助員（1年分出金者）に、茨城県結城町1人、群馬県元惣社村1人、同県沼田町1人、福島県須賀川町1人、同県川俣町1人、香川県桑山村1人の計6人（計32人中）が入会していた。3月は、大阪府高槻町1人、兵庫県米田村1人、長野県諏訪町1人、同県上田町1人、栃木県足利町1人、群馬県前橋市1人、同県富岡町1人、同県川端村1人、青森県蟹田村1人、岩手県一ノ関町1人、同県花輪町1人、新潟県亀田町1人、和歌山県和保村1人、高知県大山村1人、福岡県勝野村1人、同県善道寺村1人、佐賀市1人、長崎市1人、熊本県八代町1人、北海道幌内村1人の計20人（計48人中）と、第2種にも京都市2人、愛知県名古屋市1人、神奈川県横須賀町1人、同県横浜市1人、

東京市3人、北海道札幌区1人の計9人（計179人中）含まれていた。

さらに、4月は、兵庫県八鹿村1人、千葉県館野村1人、和歌山県広村1人、福岡県大川村1人、韓国群山港1人の計5人（計34人中）に、第2種の京都市1人、東京市2人、山口市1人の計4人（計144人中）が加わり、5月は三重県五ヶ谷村1人、栃木県上三川町1人、島根県粕淵村1人の計4人（計27人中）で、6月は第2種に東京市1人（計67人中）が入会していた。このため、第1種35人、第2種14人の合計49人が入会し、その道府県および市区町村の内訳は26道府県と韓国の42市区町村等に分布していたことが確認でき、新しい階層の全国規模の募集活動になっていたと理解できた。

そして、1901年の岡山孤児院への直接入会者（新賛助員）の賛助金（毎月と1年分）と現賛助員の直接送金者の賛助金（毎月と1年分）の月別の送金額（表7下）は、1月が53円50銭、2月が73円54銭6厘、3月が77円45銭、4月が73円10銭と、70円台に増加していた。しかし、5月からは減少傾向に転じ、5月が45円90銭、6月が44円40銭、7月が51円52銭5厘、8月が23円72銭、9月が38円64銭、10月が21円51銭、11月が32円2銭となり、12月は56円74銭に増加していた。このため、同院への直接送金額の合計は、592円5銭1厘となり、同年の賛助金総額（7,803円18銭6厘）の約7.6%を占め、同院の歳入（29,665円75銭6厘）の約2.0%であった。

おわりに

以上、本稿では、1898年に新設された岡山孤児院の賛助員が1万人を超えた1900年および1901年に着目し、菊池・中嶋論文⁴⁰⁾による支援ネットワークシステムの構築過程の年代別検討の成果の延長として、同期間内に全国的な支援ネットワークシステムがどのように構築されたのか、並び

にその実践の歴史的意義を考究して来た。その際、(1) 全国的な支援ネットワークシステムの構築方法、(2) 全国的な支援ネットワークシステムの運営実態、(3) 個々の職員、賛助員、地方委員における価値感(観)の内容の3点を中心に実証的分析を試みた。

その結果、(1) については、1900年の場合は、本部直接収入、職員による集金、地方委員による募集活動が確認できた。まず、では、5月(92円250銭)、2月(88円80銭)、1月(74円660銭)、7月(61円700銭)、9月(53円700銭)の順に多くなっている。次に、職員による集金は、宮崎利平・佐藤惣吾が岡山市内などを、宮崎兵吉郎が岡山県内などを、大西義一が徳島市で集金活動を実施した。さらに、大阪市では、小野田鎮が1月から5月までの5ヶ月間連続で募集活動も注目できた。各地の地方委員による地道な集金活動が展開されたことも見逃せない。まず、京都市の辻慶三地方委員の活動が注目でき、東京市の福島四郎地方委員、同市の小崎弘道地方委員、大阪市の池田為治地方委員などが精力的に活動していたことが示唆された。

また、翌1901年では、職員による新賛助員募集と賛助金集金、音楽幻燈隊での新賛助員募集と地方委員の依頼、地方委員による新賛助員募集と賛助金の集金、同院に直接入会した新賛助員と直接送金が確認でき、賛助員募集関係の事務処理体制の強化が図られた。このうち、では大西義一と宮崎利平が東京市に在駐して同市等で賛助員募集と集金等を実施したこと、佐藤惣吾と宮崎兵吉郎が岡山市と岡山県内の町村で賛助員募集と集金等をしたこと、入江大九郎が関西方面を含む近隣県で賛助員募集と集金を実施したことなどが鍵となり、このような役割分担が募集活動の効果の向上に寄与していたことが明確になった。そして、音楽幻燈隊での新賛助員募集と地方委員の依頼と、地方委員による新賛助員募集と賛助金の集金および、同院への直接入会と直接送金も機能したことが理解できた。このため、全国規模の支援ネットワークシステムの構築と継続が

なされ、そのポイントは同院の積極的な賛助員募集活動のよる一般市民への宣伝に加え、地方委員を含む綿密な役割分担を個々の関係者が自覚的に担うという活動認識が存在していたためと理解できた。

次いで、(2) に関しては、賛助員募集や賛助金募集において地域格差が少なくなかった当時、全国的な支援ネットワークシステムの維持・運営の難しさが汲み取れた反面、1900年の場合では、本部直接収入、職員による募金、地方委員による集金など、集金方法の多様化に特徴が見られた。なかでも、東京市で活躍した福島地方委員や大阪市で貢献した池田地方委員などの大きな成功事例がある一方、集金額の低迷や断続的な取り組みに終始していた地方委員の働きもあった。こうした課題に対し、1901年には岡山孤児院東京出張所が設けられ、「特別廣告」を出しながら、東京市での活動が本格始動し、例えば、東京婦人慈善談話会開催に向けて、東京出張所職員の大西が、鳩山春子、三輪田真佐子、矢島楫子、潮田千勢子らを熱心に説得するなど、地道な働きがあったことが浮き彫りになった。加えて、岡山県内で賛助員募集活動を展開していた宮崎、佐藤を中心に、外部運動員の増員、さらには、関西、四国、九州へと範囲を広げつつ、職員らによる鉄道沿線の慈善箱の設置及び音楽幻燈会で賛助員募集活動も行われ、各地の状況に応じながら、なおかつ職員、地方委員、賛助員などの連携により、そのシステムの運営・維持が可能となっていたことが示唆できた。

他方、地方委員による賛助金募金と新賛助員募集については、岡山県内、北海道内、東北地方、関東地方、北信越地方、近畿地方、中国地方、四国地方、九州地方などの各地での状況を表9及び表10において明らかにしたように、全国規模の賛助員募集活動のシステムが拡大していくことが確認できた。特に、1901年の音楽幻燈隊の巡回活動で見られたように、賛助員の少ない北関東や北信地域の主要市町村で、同幻燈会を開催し、新賛助員を募集し、地方委員が就任したため、賛助員の全国的なネットワーク

システムの拡大につながり、その拠点（結節点）となる地方委員が賛助員を開拓し、新賛助員の増員につなげる体制が出来上がっていたことが確認できた。この他にも、音楽幻燈隊の別働隊的な活動をしていた北海道の元浦河青年会、『婦女新聞』などのメディアを活用し、募集活動に勤しんでいた関東地方の事例、地方委員同士で相互チェックをし、情報共有に余念がなかった近畿地方の事例、さらに、停滞状況に対し初心に戻ることで賛助員募集の継続・拡大を目論んでいた九州地方の事例なども、もう一つの重要な要因であると理解できた。このため、各地の状況に応じつつ、職員、地方委員、賛助員をはじめ、各地の理解者・協力者の力添えも加わりながら、この全国的な賛助員の支援ネットワークシステムの維持・拡大が可能となっていたと考究した。

その結果、1900年の賛助員募集活動は、1月末の総賛助員数が7,303人から9月末には10,310人に達し、1万人の目標を達成し、12月末には10,872人まで拡大した。また、毎月の賛助員の集金額も、毎月400円台から700円台あり、最大は12月の765円21銭、最低が3月の427円79銭となり、同年賛助金総額は6,695円7銭2厘を集める成果が確認でき、同院の同年の総収入（27,892円2銭9厘）の24%を占めた。

一方、1901年は、昨年12月に総賛助員数は10,872人と1万人の大台に達したところから始まり、1月末の11,211人から11月末の13,425人へ2,214人増加したが、12月に2,216人の退会者がいたため同年末は11,440人となり、初めて総賛助員が減少していたことが確認できた。また、月別の賛助金の集金額は、11月の最低362円2銭から1月の最高938円60銭となり、8月と9月が400円台、6月が500円台、5月と7月が600円台、4月と12月が700円台、3月が800円台、1月と2月が900円台と1月から4月までの集金額が多く、その後減傾向となり、12月に一時回復していた。その結果、同年賛助金総額は7,803円18銭6厘となり、同院の歳入（29,665円75銭6厘）の26.3%を占める成果が確認できた。

最後に、こうした全国規模のシステムを裏打ちする個々人の認識・理解の変化や価値感（観）の変容に着目しつつ、(3) に関して考察すると次のようになる。石井院長が「明治三十二年は實は感謝せざる可らざるの年にありき何者明治三十二年は我が岡山孤児院が教育上、養育上、財政上、に於て一大進歩をなしたるの年なればなり」と述べたように⁴¹⁾、1989（明治32）年から1990（明治33）年は、同院にとって一つの転換期であったと言える。こうした変動時期にこそ、石井院長は「静思」をし、1901年の岡山孤児院の活動方針に積極的な賛助員募集などを据え、冷静な判断や思慮深い考察を求めながら実施した。そのことは各々の職員、地方委員、賛助員に共通して希求されたことであり、とりわけ、賛助員募集数や集金額に見られた地域格差への着目を可能にした。一方、「失意のときには忍耐せよ 得意の時には油断するな 而して外部に向つては大胆なれ」という過去の教訓をも忘れず、石井は、賛助員募集においては「大胆」な実行力が必要であると強調し、この基本的な考え方が、音楽幻燈隊の巡回運動や各地方委員による現地での新規賛助員獲得といったアウトリーチ機能に少なからず反映されていた。さらに、こうした一連の活動の意義として、「孤児院は天国にして世の仁人義士がその財宝を積むところなり（悟解）」と、地方委員の活躍や賛助員の増員を促す理由付けも用意していた。これらを有言実行するべく、「昨年初の計画は本年に完く実行せらるべし之れ年来の経験なり（理想の実現するに少くも一年を要す）」、「計画なければ成功なし」などを掲げ、計画的な取り組みとその継続こそが肝要であるとする認識の深化が見られていた。

このため、1900年及び1901年の賛助員募集活動は、岡山孤児院の実践の質を慈善的救済活動から組織的救済活動へのパラダイム転換の兆しが見られる現象に1つと理解できた。そして、これがさらに進化するためには、音楽幻燈隊や地方委員などを鍵要因としながら拡大し、慈善事業における重要な価値転換を図る契機となると仮定できた。それ故に、今後は、明治

期における岡山孤児院の賛助員募集などの一大プロジェクトの全国的な支援ネットワークシステムの構築が、さらに、どのように進化していきかを解明することが課題になると理解した。

注

- 1) 菊池義昭、中嶋洋「岡山孤児院の賛助員の全国的な支援ネットワークシステムの構築過程とその歴史的役割 - 研究課題と時期区分を中心に -」『石井十次資料館研究紀要』第20号、2019年8月、81頁から83頁。
- 2) 以下104頁16行目までは、同上「岡山孤児院の賛助員の全国的な支援ネットワークシステムの構築 - 1898年5月の着手から1899年まで -」『東北社会福祉史研究』第38号、2020年3月、1頁から39頁を参照し、要約した。
- 3) 「岡山孤児院賛助員及賛助金比較表」『岡山孤児院新報』第42号、1900年4月20日、1頁。
- 4) 「明治三十一年度決算報告」『同』第33号、1899年7月10日、5頁。「明治三十二年度決算報告」『同』第40号、1900年2月15日、6頁。
- 5) 以下105頁20行目までは、菊池義昭「明治30年代前半の岡山孤児院の運営体制と寄付金募集組織の強化(2)」『石井十次資料館研究紀要』創刊号、2000年4月、4頁から38頁を参照、要約した。
- 6) 「新報」の「回顧」『岡山孤児院新報』第39号、1900年1月20日、1頁。
- 7) 「新報」の「財政上」『岡山孤児院新報』第39号、1頁。
- 8) 「旭川町音楽幻燈会(小野田鎮)」『岡山孤児院新報』第48号、同年10月25日、4頁。
- 9) 「日誌」の「十月廿五日」『岡山孤児院新報』第49号、同年11月15日、4頁。
- 10) 同上。
- 11) 「日誌」の「十月卅日」『岡山孤児院新報』第49号、4頁。
- 12) 「一年壹円賛助員法の新設に就て」『岡山孤児院新報』第52号(1901年2月10日、1頁)。
- 13) 表5、表6は、「新賛助員」『同』第52号(6頁から8頁)、「同」『同』第53号附録(同年3月10日、1頁から4頁)、「同」『同』第54号(同年4月10日、5頁から7頁)、「同」『同』第55号附録(同年5月10日、2頁から4頁)、「同」『同』第56号(同年6月10日、8頁)、「同」『同』第56号附録(同、1頁、2頁)、「同」『同』第57号(同年7月15日、8頁)、「同」『同』第58号(同年8月10日、7頁、8頁)、「同」『同』第59号(同年9月10日、8頁)、「賛助員

- 加盟人員」「新賛助員」『同』第60号（同年10月15日、4頁、5頁）、「新賛助員」『同』第61号（同年11月15日、8頁）、「同」『同』第62号（同年12月10日、6頁、7頁）、「同」『同』第63号（1902年1月10日、7頁、8頁）より作成した。
- 14) 以下118頁7行目までの事実関係は、児嶋虢一郎編『石井十次日誌（明治三十四年）』（1973年12月、3頁から5頁、149頁、150頁）、「明治三十四年自一月至十二月決算報告」『同』第65号（1902年3月10日、1頁）より引用、参照した。
- 15) 以下本項の事実関係は、「音楽幻燈隊報告」の「東京に於ける運動」『同』第32号（1899年6月21日、3頁、4頁）、「賛助員府県別表」『同』第40号（1900年2月15日、1頁）、「日誌」『同』第50号（同年12月10日、3頁）、「日誌」『同』第51号（1901年1月10日、4頁、5頁）、「東京賛助員募集」『同』第53号（6頁）、児嶋編『石井十次日誌（明治三十三年）』（1970年2月、114頁、131頁、140頁、145頁、147頁、154頁、163頁）より引用、参照した。
- 16) 以下本項の事実関係は、「日誌一月中」「新賛助員」「賛助寄付金」『同』第52号（4頁から8頁）、同『同日誌（明治三十四年）』（5頁、11頁、12頁、14頁、15頁、17頁、19頁）、『明治三四年壹月 貳月 三月 日誌 岡山孤児院』（1月8日、1月11日、1月30日）より引用、参照した。
- 17) 以下本項の事実関係は、「特別廣告」『同』第52号（1頁）、「日誌」「東京通信（二月中）」「賛助寄付金（二月中）」『同』第53号（8頁）、「同」第53号（4頁から8頁）、「新賛助員」『同』第53号附録（2頁から4頁）、同『同日誌（明治三十四年）』（33頁から39頁）、『明治三四年壹月 貳月 三月 日誌 岡山孤児院』（2月27日）、山澤俊夫「をんな発刊の辞」『をんな』第1号（大日本女学会、1901年1月31日）より引用、参照した。なお、
- 18) 以下本項の事実関係は、「廣告」「日誌（三月中）」「賛助寄付金」「新賛助員」『同』第54号（1頁、2頁、4頁から7頁）、「賛助寄付金」「新賛助員」『同』第55号附録（1頁、3頁、4頁）、同『同日誌（明治三十四年）』（48頁、55頁、57頁から59頁）、『明治三四年壹月 貳月 三月 日誌 岡山孤児院』（3月9日、3月11日）、『明治三四年四月 日誌』（4月4日、4月10日、4月19日、4月24日）より引用、参照した。
- 19) 以下本項の事実関係は、「謹告」「事務所移転」「日誌（五月中）」「東京婦人慈善談話会（報知新聞より転載）」「東京通信」「賛助寄付金」「新賛助員」『同』第56号（1頁、2頁、6頁から8頁）、「新賛助員」『同』第56号附録（1頁、2頁）、「ムーカツト嬢幻燈演説会」「賛助寄付金」「新賛助員」『同』第57号（5

頁、7頁、8頁)、「新賛助員」『同』第58号(7頁、8頁)、同『同日誌(明治三十四年)』(63頁、67頁から70頁)、『明治三十四年五月 日誌 岡山孤児院本部』(5月9日、5月10日、5月18日、5月24日)、『明治三十四年六月 日誌 岡山孤児院』(6月5日、6月22日)、炭谷小梅「岡山孤児院の歴史」『をんな』第6号(1901年6月25日、な6頁からな12頁)、同「同(續)」『同』第9号(同年9月25日、な6頁からな12頁)より引用、参照した。なお、『をんな』第6号と第9号に掲載された炭谷小梅「岡山孤児院の歴史」は、5月12日の東京婦人慈善談話会で、炭谷小梅が石井十次院長の書生時代からの「実見談」を紹介した内容であったと理解できた。

- 20) 以下本項の事実関係は、註を除く、「日誌(四月中)」『同』第55号(6頁)、「日誌(七月中)」『同』第58号(1頁)、「日誌(八月中)」『同』第59号(2頁)、「特別廣告」『同』第62号(1頁)、「賛助寄付金」「新賛助員」『同』第63号(7頁、8頁)、「明治三十四年自一月至十二月決算報告」『同』第65号(1頁)、同『同日誌(明治三十四年)』(115頁、121頁)、『明治三十四年四月 日誌』(4月8日、4月23日、4月25日)、『明治三十四年六月 日誌 岡山孤児院』(6月15日、6月19日)、『明治三十四年九月 十月 日誌 岡山孤児院』(9月17日、10月23日)、『明治三十四年十二月 日誌』(12月7日、12月10日、12月13日、12月16日、12月21日)より引用、参照した。
- 21) 表7と表10は、「賛助寄付金」『同』第52号(8頁)、「同(二月中)」『同』第53号(8頁)、「同」『同』第54号(4頁)、「同」『同』第55号附録(1頁)、「同」『同』第56号(7頁)、「同」『同』第57号(7頁、8頁)、「同」『同』第58号(7頁)、「同八月中」『同』第59号(7頁、8頁)、「同」『同』第60号(4頁)、「同」『同』第61号(7頁)、「同十一月中」『同』第62号(6頁)、「同」『同』第63号(7頁)より作成した。
- 22) 以下本項の事実関係は、表7よりの引用を除き、「賛助寄付金」『同』第51号(8頁)、「日誌一月中」『同』第52号(2頁、5頁)、「日誌(六月中)」『同』第57号(2頁)、「日誌(七月中)」『同』第58号(3頁)、「日誌十一月中」『同』第62号(3頁)、「明治三十四年自一月至十二月決算報告」『同』第65号(1頁)、同『同日誌(明治三十四年)』(22頁、32頁、41頁、42頁)、『明治三十四年十一月 十二月 日誌 岡山孤児院』(12月19日、12月27日)、『明治三十四年一月 二月 三月 日誌 岡山孤児院』(1月8日、1月30日、1月31日、2月12日)、『明治三十四年五月 日誌 岡山孤児院本部』(5月2日、5月3日、5月6日、5月8日、5月30日)、『明治三十四年七月 日誌 岡山孤児院』(7月6日、7月10日、7月11日、7月16日、7月23日)、『明治三十四年八月

日誌 岡山孤児院』(8月26日、8月29日)、『明治三十四年九月 十月 日誌 岡山孤児院』(9月13日、9月26日、10月4日、10月14日、10月28日)、
『明治三十四年十一月 日誌』(11月8日、11月29日)、『明治三十四年十二月 日誌』(12月7日、12月11日、12月14日、12月21日)より引用、参照した。

- 23) 以下本項の事実関係は、「日誌」『同』第51号(5頁)、「日誌一月中」『同』第52号(5頁)、「日誌三月中」『同』第54号(2頁)、「日誌(四月中)」『音楽幻燈会報告』『同』第55号(6頁から8頁)、「日誌(五月中)」『同』第56号(1頁、4頁)、「日誌(六月中)」『同』第57号(2頁)、「日誌(七月中)」『同』第58号(1頁、3頁、4頁)、「日誌(九月中)」『同』第60号(1頁、2頁、3頁)、「日誌十月中」「高岡音楽幻燈会」『同』第61号(3頁、6頁)、「日誌十一月中」『同』第62号(2頁、3頁)、「西宮音楽幻燈会」「賛助寄付金」『同』第63号(4頁、5頁、7頁)、同『同日誌(明治三十四年)』(5頁、22頁、24頁、32頁、42頁、52頁、61頁、62頁、75頁、112頁)、『明治三十四年壹月 式月 三月 日誌 岡山孤児院』(1月5日、1月29日、1月30日、1月31日、2月2日、2月12日、2月27日、3月1日、3月9日)、『明治三十四年四月 日誌』(4月3日、4月24日、4月25日、4月26日、4月28日、4月29日)、『明治三十四年五月 日誌 岡山孤児院本部』(5月1日、5月3日、5月14日、5月18日、5月24日、5月25日、5月26日、5月28日、5月29日)、『明治三十四年六月 日誌 岡山孤児院』(6月2日、6月16日、6月21日、6月26日)、『明治三十四年七月 日誌 岡山孤児院』(7月2日、7月10日、7月11日、7月14日、7月18日、7月19日、7月20日、7月21日、7月22日、7月24日、7月26日、7月27日)、『明治三十四年八月 日誌 岡山孤児院』(8月1日、8月3日、8月7日、8月9日)、『明治三十四年九月 十月 日誌 岡山孤児院』(9月12日、9月13日、9月19日、9月23日、9月24日、10月4日、10月6日、10月23日)、『明治三十四年十一月 日誌』(11月8日、11月15日、11月19日、11月23日)、『明治三十四年十二月 日誌』(12月7日)より引用、参照した。
- 24) 表8は、菊池義昭「岡山孤児院の音楽幻燈(活動写真)隊の活動と養護実践のかかわり - 研究目的と全体的動向を中心に - 」『共栄児童福祉研究』第4号(1997年3月、表6, 88頁)、「新地方委員」「新賛助員」『同』第54号(4頁欄外、5頁から7頁)、「新賛助員」「岡山孤児院音楽幻燈会備中早島町」「備中茶屋町寄付金」「福田新田」『同』第55号附録(2頁から6頁)、「新地方委員」「新賛助員」『同』第56号(6頁欄外、8頁)、「新賛助員」『同』第56号附録(1

- 頁、2頁)、「新地方委員」「新賛助員」『同』第57号(7頁、8頁)、「同」「同」『同』第58号(7頁、8頁)、「同」「同」『同』第59号(7頁、8頁)、「新地方委員」「賛助員加盟人員」「新賛助員」『同』第60号(4頁、5頁)、「新地方委員」「新賛助員」『同』第61号(7頁、8頁)、「新賛助員」『同』第62号(6頁、7頁)、「地方委員」『同』第62号附録(1頁)、「新地方委員」「新賛助員」『同』第63号(7頁、8頁)より作成した。
- 25) 表9は、『明治三十三年六月調岡山孤児院地方委員姓名録』、「地方委員姓名表(明治三十三年一月調)」『同』第40号附録(1900年2月15日、2頁)および、『同』第46号から第64号に掲載された「新地方委員」より作成した。
- 26) 個々の地方委員の就任年月については、『同』第21号から第23号、第25号、第26号、第33号、第34号、第36号、第38号に掲載された「地方委員廣告」「地方委員姓名」「地方委員」および、25)より確認し、確定した。ただし、就任年月が正確に確定できない場合は、地方委員として確認した年月に「以前」を付けた。また、上記資料中の氏名の明らかな誤記は修正した。
- 27) 以下本項の事実関係は、「入院児」「地方委員」『同』第54号(4頁、5頁欄外)、「学校設備品」「物理機器寄付」「基本金募集について」「日誌(四月中)」『同』第55号(1頁、2頁、3頁、5頁、6頁)、「廣告」『同』第56号(3頁欄外)、『明治三四年四月 日誌』(4月3日、4月15日、4月20日)、『明治三十四年五月 日誌 岡山孤児院本部』(5月1日、5月21日、5月31日)、『明治三十四年六月 日誌 岡山孤児院』(6月20日、6月21日)、『明治三十四年十一月 日誌』(11月18日)より引用、参照した。
- 28) 以下本項の事実関係は、「日誌三月中」『同』第54号(2頁)、「日誌(四月中)」『同』第55号(5頁、7頁)、「日誌(八月中)」『同』第59号(4頁)、『明治三十四年壹月 貳月 三月 日誌 岡山孤児院』(3月12日)、『明治三十四年四月 日誌』(4月15日、4月29日)より引用、参照した。
- 29) 以下本項の事実関係は、「日誌三月中」『同』第54号(2頁、3頁、4頁)、「入院児」『同』第55号(2頁)、『明治三十四年壹月 貳月 三月 日誌 岡山孤児院』(2月8日、2月15日、3月11日、3月27日)より引用、参照した。
- 30) 以下本項の事実関係は、「事務所移転」『同』第56号(1頁)、「日誌(九月中)」『同』第60号(3頁)、「日誌十一月中」『同』第62号(2頁)、『明治三十四年七月 日誌 岡山孤児院』(7月3日)、『明治三十四年八月 日誌 岡山孤児院』(8月3日)、『明治三十四年九月 十月 日誌 岡山孤児院』(9月3日、9月30日、10月30日)、『明治三十四年十一月 日誌』(11月4日)より引用、参照した。

- 31) 同「岡山孤児院の音楽幻燈(活動写真)隊の活動と養護実践のかかわり - 研究目的と全体的動向を中心に -」『共栄児童福祉研究』第4号(表6, 88頁)、『地方委員』『同』第46号(1900年8月15日、6頁)、『日誌』『同』第53号(5頁)。
- 32) 「日誌一月中」『同』第52号(3頁、4頁)、『日誌(六月中)』「入院児履歴」『同』第57号(1頁、3頁)、『明治三四年壹月 貳月 三月 日誌 岡山孤児院』(1月26日、1月29日)、『明治三十四年九月 十月 日誌 岡山孤児院』(9月7日)、『明治三十四年六月 日誌 岡山孤児院』(6月3日)。
- 33) 「京都通信」『同』第55号(8頁)、『日誌(七月中)』『同』第58号(3頁)、『明治三四年壹月 貳月 三月 日誌 岡山孤児院』(1月6日、1月7日)、『明治三四年四月 日誌』(4月5日)、『明治三十四年五月 日誌 岡山孤児院本部』(5月2日)、『明治三十四年七月 日誌 岡山孤児院』(7月2日、7月11日)。
- 34) 「日誌一月中」『同』第52号(3頁)、『新賛助員』『同』第53号附録(2頁)、『日誌(七月中)』『同』第58号(2頁)、『日誌(八月中)』『同』第59号(3頁)、『明治三四年壹月 貳月 三月 日誌 岡山孤児院』(2月22日、3月5日)、『明治三四年四月 日誌』(4月29日)、『明治三十四年七月 日誌 岡山孤児院』(7月3日)、『明治三十四年九月 十月 日誌 岡山孤児院』(9月29日)。
- 35) 以下本項の事実関係は、『紀伊日置村第一回通信』『同』第55号(8頁)、『明治三四年壹月 貳月 三月 日誌 岡山孤児院』(1月21日)、『明治三四年四月 日誌』(4月4日、4月30日)、『明治三十四年五月 日誌 岡山孤児院本部』(5月29日)、『明治三十四年七月 日誌 岡山孤児院』(7月6日)より引用、参照した。
- 36) 以下本項の事実関係は、『日誌一月中』『同』第52号(2頁、8頁)、『日誌』『同』第53号(4頁)、『日誌(四月中)』『同』第55号(5頁、6頁)、『日誌(十月中)』『同』第61号(3頁)、『明治三四年壹月 貳月 三月 日誌 岡山孤児院』(1月3日、1月4日、2月4日、2月13日)、『明治三四年四月 日誌』(4月10日、4月17日)、『明治三十四年五月 日誌 岡山孤児院本部』(5月9日、5月13日)、『明治三十四年六月 日誌 岡山孤児院』(6月17日)、『明治三十四年九月 十月 日誌 岡山孤児院』(10月2日、10月4日)、『明治三十四年十一月 日誌』(11月26日)、『明治三十四年十二月 日誌』(12月24日)より引用、参照した。
- 37) 以下本項の事実関係は、『日誌三月中』『同』第54号(2頁、3頁)、『日誌(五月中)』『同』第56号(3頁)、『日誌(六月中)』「入院児履歴」『同』第57号(2

頁、3頁)、「日誌(七月中)」『同』第58号(2頁)、「六月二四日松山地方委員を……」『同』第58号附録(1頁、2頁)、『明治三四年壹月 式月 三月 日誌 岡山孤児院』(3月9日、3月15日、3月19日)、『明治三四年四月 日誌』(4月26日)、『明治三十四年五月 日誌 岡山孤児院本部』(5月19日、5月31日)、『明治三十四年六月 日誌 岡山孤児院』(6月24日、6月26日、6月27日、6月29日)、『明治三十四年七月 日誌 岡山孤児院』(7月3日、7月6日、7月11日)より引用、参照した。

- 38) 以下本項の事実関係は、「門司通信」『同』第53号(6頁)、『明治三四年壹月 式月 三月 日誌 岡山孤児院』(2月4日)、『明治三十四年六月 日誌 岡山孤児院』(6月1日)、『明治三十四年九月 十月 日誌 岡山孤児院』(9月8日、10月30日)より引用、参照した。
- 39) 以下本項の事実関係は、「新賛助員」『同』第52号(6頁から8頁)、「同」『同』第53号附録(1頁から4頁)、「同」『同』第54号(5頁、6頁)、「同」『同』第55号附録(3頁、4頁)、「同」『同』第56号(1頁)、「同」『同』第57号(8頁)「明治三十四年自一月至十二月決算書」『同』65号(1頁)より引用、参照した。
- 40) 同「岡山孤児院の賛助員の全国的な支援ネットワークシステムの構築過程とその歴史的役割 - 研究課題と時期区分を中心に - 」『石井十次資料館研究紀要』第20号、2019年8月、1頁から39頁。
- 41) 「新報」の「回顧」『岡山孤児院新報』第39号、1900年1月20日、1頁。

1900年と1901年の岡山孤児院の賛助員の全国的な
支援ネットワークシステムの構築の実態（中篇・菊池）（183） 48

山陽鉄道駅員	12	2			3		1			4
上伊福町		2								
岩田町		1								
伊藤運送店内	3									
八番町山鉄駅員			3							
高等女学校										2
垂公園										1
六番町		1								
四番町				1						
二番町		1								
山崎町		1								
上西川	1		2							
船頭町							1			
野田屋町	3				2					
柿屋町	1									
東田町	1						1			
東濱田町							1			
右京町							1			
小原町	1									
瓦町	1									
妙音寺口	1									
二日市町	1									
七日市町			1							
花畑	4		1							1
大道			1							
網濱	1									
門田屋敷	4	1	1		2			1	3	1
徳吉			1							
絹糸紡績内	6				1					
上片上町	1									
上之町	1									
難波町									2	
山陽女学校	1									
第六高等学校									5	1
国富	1								1	
垂水村	1									
山門村	1									
福田新田村					1					
本荘村					1					
田ノ口村					1					
下津井					32					
吹上村					1					
片瀬町										1
下田町							1			1
下ノ町丸善商社内										4
紙屋町							1			
御津郡石島村							1			1
同郡一宮村							1			

同郡金川村									1			
同郡宇甘東村									1			
同郡横井村									1			
香登地方部												
和気郡片上町	2											
和気郡伊部村			1									
和気郡三石村					2							
倉敷地方部												
倉敷町							1			3	117	9
山陽鉄道倉敷駅員	1											
窪屋郡倉敷町		4										
笠岡地方部												
和気郡笠岡町	1											
小田郡笠岡町		2										
哲多郡上市村		1										
英田郡倉敷村		1										
同郡豊田村					1							
郷野郡石井村		2										
高梁地方部												
上房郡有漢村		8		1								
上房郡高梁			1		1		1		1			2
上房郡中井村				1								
勝山地方部												
真島郡勝山村		1										
弓削地方部												
久米北条郡桑村		1										
津山地方部												
西北条郡津山町		2									2	
東南条郡津山東新町			1									
久米郡津山中鉄駅				1								
津山郡苫田郡林田村									1			
都窪郡加茂村									1			
計	45	103	52	61	34	98	4	9	17	20	142	50

<注> 各月の期間は、前表と同様。各郡名は、1900年4月1日郡制の施行後の郡名である。

(『岡山孤児院新報』第40号から第51号附録より作成)

表3 1900(明治33)年の 本部直接(岡山孤児院直接)、職員、地方委員による月別の賛助金集金の内容

市町村	氏名等	1月中	2月中	3月中	4月中	5月中	6月中	7月中	8月中	9月中	10月中	11月中	12月中
岡山市	本部直接収入	74円660	88円80	49円470	48円250	92円250	49円150	61円700	36円140	53円700	39円950	39円510	35円850
岡山市	宮崎利平・佐藤 惣吾	87.300	83.400	89.000	52.000	111.650	39.950	109.950	75.740	65.100	50.700	92.800	65.100
岡山市	宮崎兵吉郎	8.600	15.600	14.700	8.300	4.300	3.900	4.500	8.300	13.900	4.200	5.600	5.500
久米町	宮崎兵吉郎		8.500	12.600	8.300	9.300	7.300	7.900	9.900	13.900	11.200	8.400	3.000
勝山町	宮崎兵吉郎			2.800	2.500	3.800	2.500	2.300	2.500	2.600	2.300	2.000	
玉島町	宮崎兵吉郎			10.000			6.300			2.600		14.100	
安岡町	宮崎利平									18.600			
高松市	宮崎利平							42.040	11.960		11.300	24.200	
丸亀町	宮崎利平							23.500	8.600				
多度津町	宮崎利平				0.100			32.000	2.500			14.100	
坂出町	宮崎利平							2.800				2.600	
善通寺町	宮崎利平							37.300	61.500	32.500		27.200	37.300
福山市	大西義一	0.600			2.900	62.000							
徳島市	佐藤惣吾	9.450	7.950		8.250					18.700		12.850	7.250
妹尾町	佐藤惣吾				8.400					10.800			
福山町	入江大九郎												14.700
神戸市	小野田鉄彌	3.700											7.600
小豆島													
香登村	武用五郎邊衛	6.500	3.200	1.500			3.200		5.700				2.500
倉敷村	漕手又次郎							4.800		17.900		1.900	2.800
味野村	津田銀雄	1.900	2.100	4.300		3.200		4.600			2.800		
津戸村	津下豊次郎						0.300						1.400
下津井村	増井金蔵								1.700	1.300		1.600	
玉島町	津垣松之助								2.500				
牛窓町	合地薩平	8.700	8.300	7.800	7.700	8.000	8.300	9.500	6.500	7.100	6.000	3.800	12.200
倉敷町	大橋孝平	2.600	2.400	4.500	2.800		2.900	7.400	2.800	2.800		3.800	6.000
安岡町	津山町		21.100	5.600		5.500		1.600	2.200	2.000		7.100	7.100
津山町	横山彦											3.800	5.200
高梁町	伊吹五郎	6.900	4.800	6.300	5.400		4.500	4.000	4.300	4.200	5.200	3.800	4.300
三割村	辻 三郎	4.600	4.000	3.500	5.900	3.500	2.700		6.200			4.900	2.800
落合町	山田義信		3.800	3.500	1.100		5.700		5.300	0.800		4.900	0.600
西川村	桑山茂												
京都市	辻麿三郎	27.200	8.200	25.750	23.500	23.200	22.700	22.800	48.200		24.100	23.100	47.900
京都市	池内為治					9.500	8.300					11.800	

表 10 1901 (明治 34) 年の地方委員の賛助員集金

市町村	氏名	1月	2月	3月	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	合計	
岡山県	吹上村	守屋乾三	2,400	2,400						1,200				6,000	
	香登村	瀧手文太郎			11,000	3,400		4,900						19,300	
	香登村	武用五郎辺衛										5,600		5,600	
	味方村	津田銀雄					8,800		8,300	6,300		5,700	3,500	32,600	
	金川村	角田清								15,100				15,100	
	藤戸村	津下豊次郎		1,400	4,600	1,600	1,400		2,600		2,500		1,200	2,400	17,700
	玉島町	津下豊次郎				2,500									4,900
	早島町	瀧手保太郎				5,800	13,800			2,400					25,000
	倉敷町	大原孫三郎				14,700	12,900		18,800			28,300	7,700		82,400
	笠岡町	浅野嘉平	2,500	2,100	1,000	2,000	1,300	2,000		1,900	2,200		1,000	3,700	19,700
	津山町	山本桃三		3,200	2,200										5,400
	津山町	山下徳三郎				4,800					5,200				10,000
	高梁町	伊吹五郎	10,000	10,500	8,000	6,300	4,000				8,300			4,000	51,100
	高梁町	磯貝延司							8,400			7,700		4,800	20,900
	有漢村	荘三郎吉									6,300		1,300		10,100
	勝山町	長谷川春吉													2,900
落合町	山田義信	1,600	2,800	2,900	2,600	2,900	2,600	3,100	2,300	2,500	5,500	2,500	5,100	36,400	
西川村	桑山茂	2,500	2,700	1,100										6,300	
北海道	函館区	磯野員為	63,500		27,200					53,000				143,700	
	小樽区	蜂谷就光				30,700								63,000	
	札幌区	越智喜三		28,950		39,550					8,900		17,900	131,800	
	札幌区	田中兔毛				(2人分)					(2人分)			11,500	
	岩見沢村	内田高吉	7,200		6,100		4,500		2,900	11,500	6,300		4,100	31,100	
	旭川町	辻秀	5,750	4,700	5,800	5,350		8,200	4,250	4,150	2,950	3,200	3,500	5,700	53,550
	滝川町	石沢龍吉		0,300	0,900	1,400								6,700	9,300
	滝川町	青山準次郎													(2人分)
	狄伏村	平野孝之助	5,000			3,000				3,000					11,000
	浦河町	水野重国				9,300				14,200					23,500
	浦河町	宇野慶次郎				(2人分)									
佐瑠太村	高橋平吉	7,400		6,200										13,600	
上下方村	浅川義一	1,800	1,900	3,800			1,700	1,500	1,400	1,300	1,400	1,400		16,200	
青森県	弘前市	石戸谷重三郎		9,200		11,600						9,900		30,700	
	藤崎町	阿部貞一	2,000											2,000	
	藤崎町	長谷川英治			5,600									9,100	
福島県	福島町	長谷川裕		4,600		5,000						2,000	2,000	13,600	
	水戸市	松井久吉									5,100		6,100	11,200	
栃木県	宇都宮市	山田六三郎	2,000				6,700		5,500		5,600			19,800	
	足利町	石川高吉								1,100	2,000	1,200		4,300	
東京都	東京市	福島四郎						1,000	10,700	1,000	0,500			13,200	
神奈川県	横浜市	林蒔				39,000	2,500		2,800	3,300	3,100	5,900	2,600	2,230	61,430
	横浜市	畑純三	6,800		14,400									21,200	
	横浜町	清水機忠	16,200		8,000		14,400	4,100		5,400				48,100	
新嘉	高城村	地	荒木信実									5,600	6,400	12,000	
富山県	富山市	地	戸田忠厚										4,500	4,500	
	高岡市	地	私立教育会										2,300	2,300	
石川県	金沢市	地	斎藤音作										4,300	4,300	
	金沢市	地	藤森忠一郎										7,200	7,200	
福井県	敦賀町	地	池見栄吉										1,200	1,200	
	敦賀町	地	人見直安										0,600	0,600	
長野県	長野市	地	松村忠雅								13,900			13,900	
	上田町	地	河合操							3,000			4,000	7,000	
岐阜県	飯田町	地	小沢慎		5,000		7,000							12,000	
	岐阜市	地	伊木久次郎	2,500	4,100		6,200					4,900		17,700	
静岡県	静岡市	地	森田弘道	8,000	8,100	7,600	7,400	6,700	8,200					45,000	
	静岡市	地	藤波甚七							12,100				27,400	
	沼津町	地	和田伝太郎							2,600	4,800	5,500	5,000	2,600	
新潟県	名古屋市	地	赤司繁太郎			8,900			7,400				10,300	26,500	
滋賀県	大津市	地	藪田信吉	7,000	8,800	7,600	4,800	5,600	4,900	6,300	4,100	4,500	4,600	3,700	66,000
	彦根町	地	若林湛次	4,300		9,600								13,900	
	彦根町	地	森山寅之助					7,300	4,100					24,500	
	長浜町	地	伊藤鶴子	9,800	8,200		6,600		5,600		7,600			5,100	47,200
京都府	八幡町	地	島田信太郎								4,300		5,600	5,600	
	京都市	地	辻慶三郎	32,400		23,800	22,200	25,900	23,300	22,000	21,300	18,500	18,800	226,800	
	京都市	地	池内勝二	8,500		11,700	7,400	7,000	9,600	6,100	7,100			18,800	
大阪府	京都市	地	安藤正二郎		9,100	7,400					12,100		11,500	9,800	81,100
	大阪市	地	池田為治	44,550	39,200		36,400	31,300	32,450	33,000	32,300	31,500	30,550	29,600	57,600

福岡県	若松市	松隈正樹	13.200			14.300			3.300							17.600
	門司市	鶴原五郎				40.100			7.300							
	門司市	並松親治	4.000	5.400	3.700	3.200	3.000	3.500	10.000	3.800	3.800	8.900	2.500	2.500	23.900	
	福岡市	岸耕田郎							3.300							3.300
	久留米市	片山静之助	7.050		7.300	6.500	5.000	5.400	9.400	5.300	4.400	5.000	4.000	4.000	9.000	16.300
	柳河町	佐々木高														
小倉市	笹尾昇蔵															
	柴田重之															
佐賀県	佐賀市	西牟田新八									7.500			9.500	17.000	
長崎県	長崎市	佐々木辰三	1.700		1.700	3.700	42.600		22.300		30.100	19.700	14.400	18.300	154.500	
	佐世保村	松尾良吉						2.900	0.900					3.800		
	佐世保村	川浪社一								1.400			5.100	6.500		
大分県	中津町	野依磨蔵		5.000	4.400		8.000	3.500	3.100		5.100		4.200	5.100	38.400	
宮崎県	臼杵村	武田猪平	9.000	3.000	0.300			3.900	0.800						9.000	
	臼杵村	日高孝平														
	高鍋町	末藤新市	0.400									0.900			2.400	
	延岡町	加藤馨之助	4.600				1.600	3.000				2.800			12.400	
	合計		938.600	901.886	805.900	757.350	682.800	546.700	621.975	471.855	471.490	508.760	362.020	746.850	7,803.186	

<注> 合計は、地方委員以外の集金者の金額を含む。地は地方委員の略で、空白はそれ以外。
 (『岡山孤児院新報』第52号から第63号、第65号より作成)